資料7

医療費分析の結果について

協会けんぽにおける
処方薬剤種類数の地域差

【目的】

医療の地域差を検討するに当たり、薬の使われ方も重要な要素と考えられる。

今回は、多剤処方やポリファーマシーといった切り口ではなく、疾病構造の違いを考慮したうえでなお、**処方薬剤の種類数に地域差があるのか**を明らかにすることを目的として分析を実施した。

【方法】

（分析対象）

2018年度及び2019年度（2018年6月～2020年5月受付分）の外来及び調剤分レセプト。

内服薬のみを分析対象とし、生薬、漢方製剤（薬価基準コード先頭3桁が510、520、590）は分析対象から除外。

（分析方法）

年度別、年齢階級別（0歳、1-3歳、4-6歳、7-12歳、13-18歳、19-39歳、40-64歳、65歳以上）、支部別に、外来受診で投薬が行われた場合の1レセプト当たりの平均処方薬剤種類数を算出し、その状況を検討した。

また、2019年度に実施した、急性上気道炎に対する抗菌薬の使用割合の分析結果との関係についても分析を行った。

【結果】

（１）年度別・年齢階級別平均処方薬剤種類数

薬剤処方を受けた外来受診レセプト件数（上段）・ 平均処方薬剤種類数（下段）

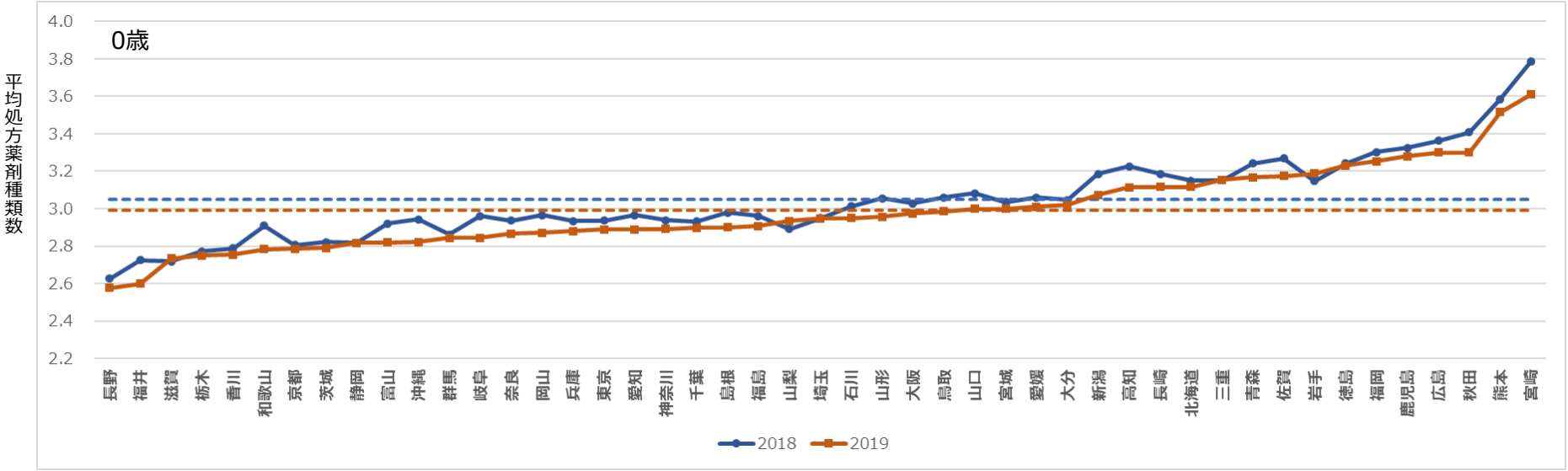
		（年代別_再掲）							
		0歳	1-3歳	4-6歳	7-12歳	13-18歳	19-39歳	40-64歳	65歳以上
2018年度	168,974,836	1,603,514	9,116,923	7,700,202	9,935,693	6,636,480	32,466,509	76,443,891	25,071,624
	2.96	3.05	3.47	3.20	2.69	2.54	2.67	2.95	3.33
2019年度	173,049,830	1,505,171	8,786,988	7,479,380	9,756,551	6,602,350	32,860,082	79,731,340	26,327,968
	2.93	2.99	3.41	3.14	2.64	2.51	2.64	2.93	3.31

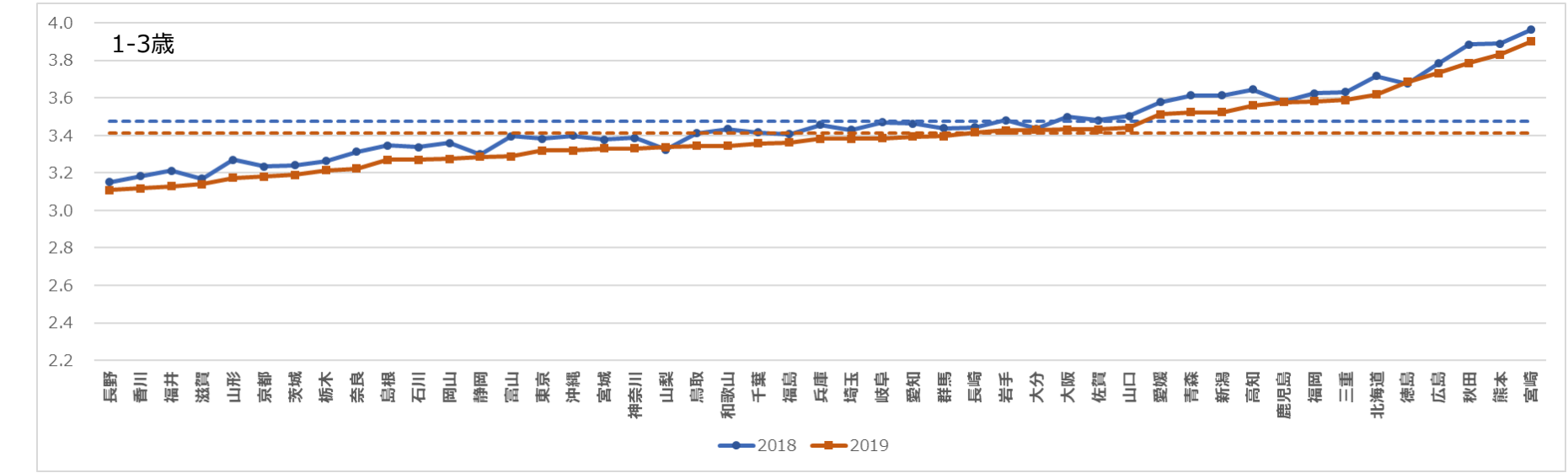
・小児（0-6歳）と65歳以上の年代で薬剤種類数は多くなっている。

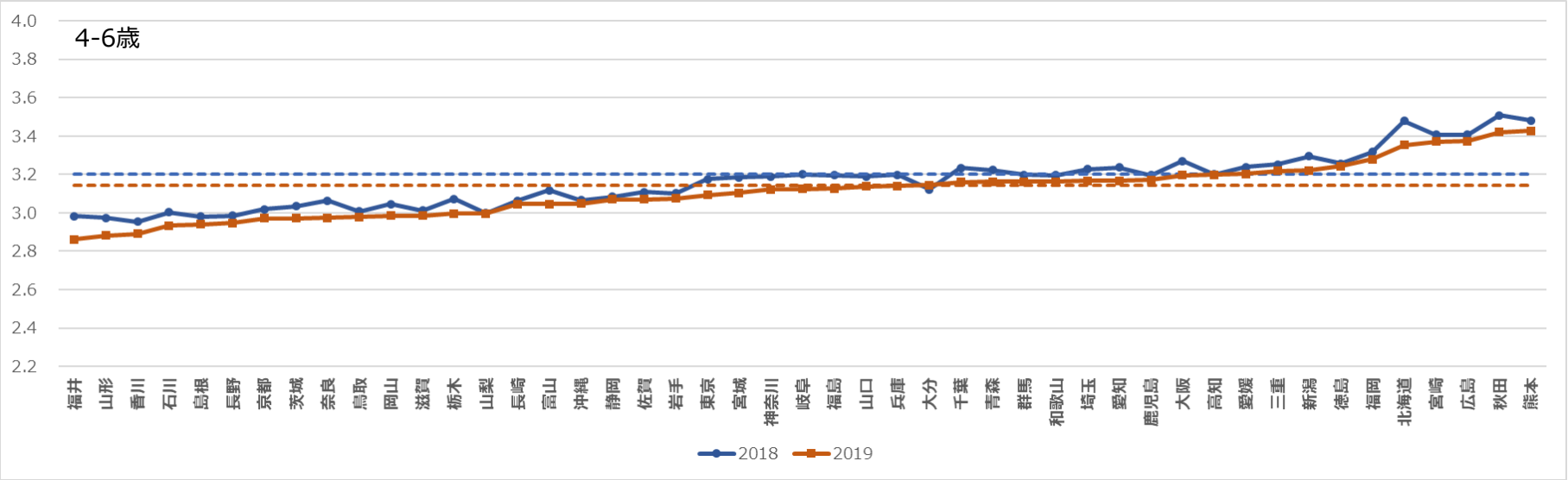
2019年度は2018年度よりも全ての年代で薬剤種類数は減少しており、若い世代ほどより減少していた。

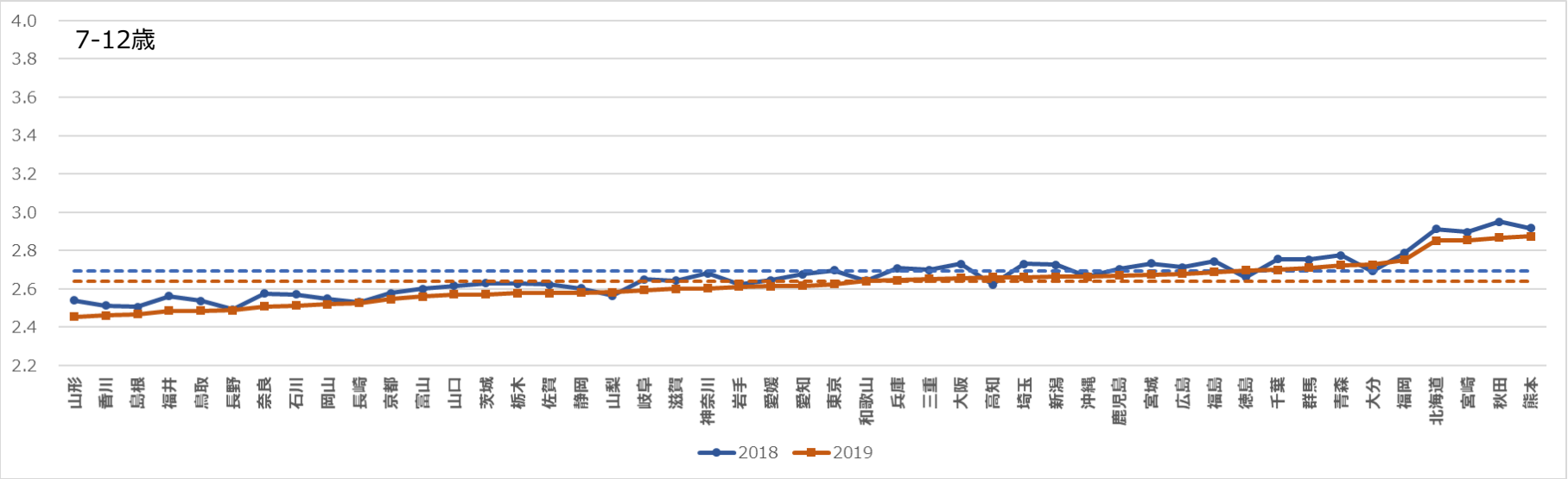
（２）年度別･年齢階級別･支部別平均処方薬剤種類数

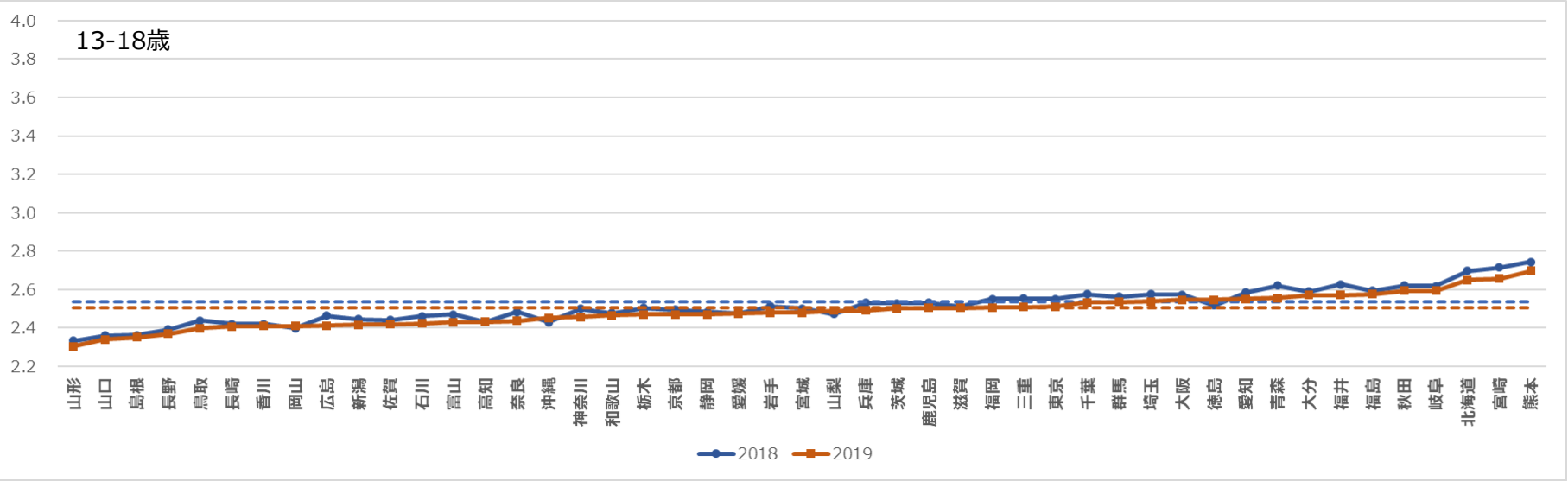
※並び順は2019年度の平均処方薬剤種類数順

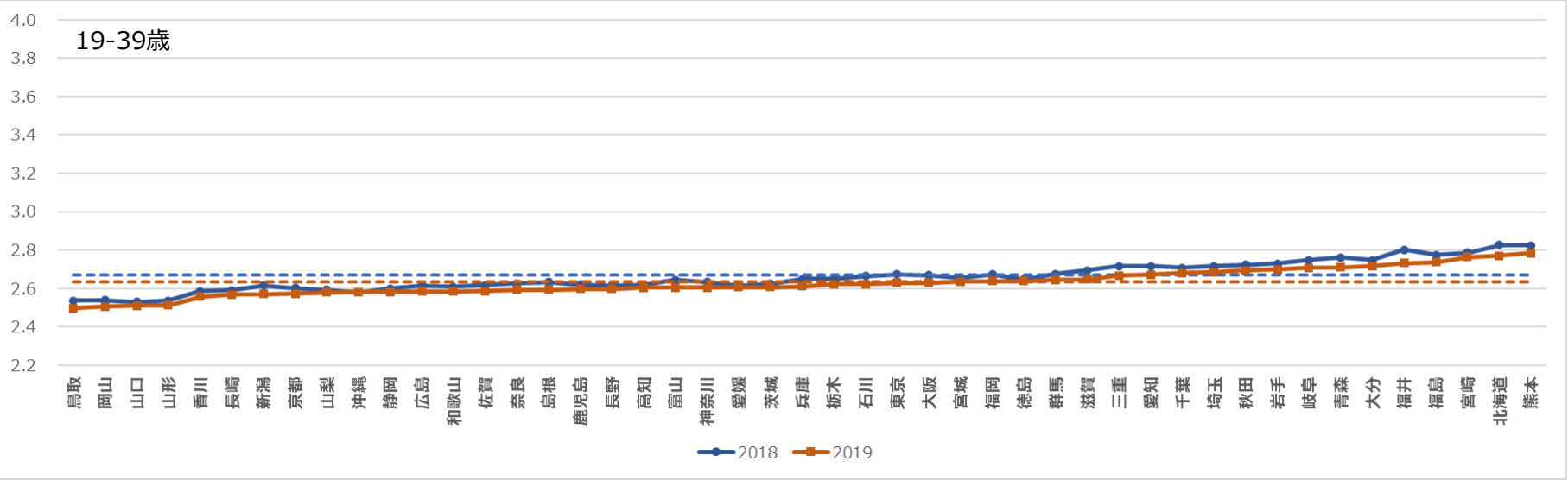


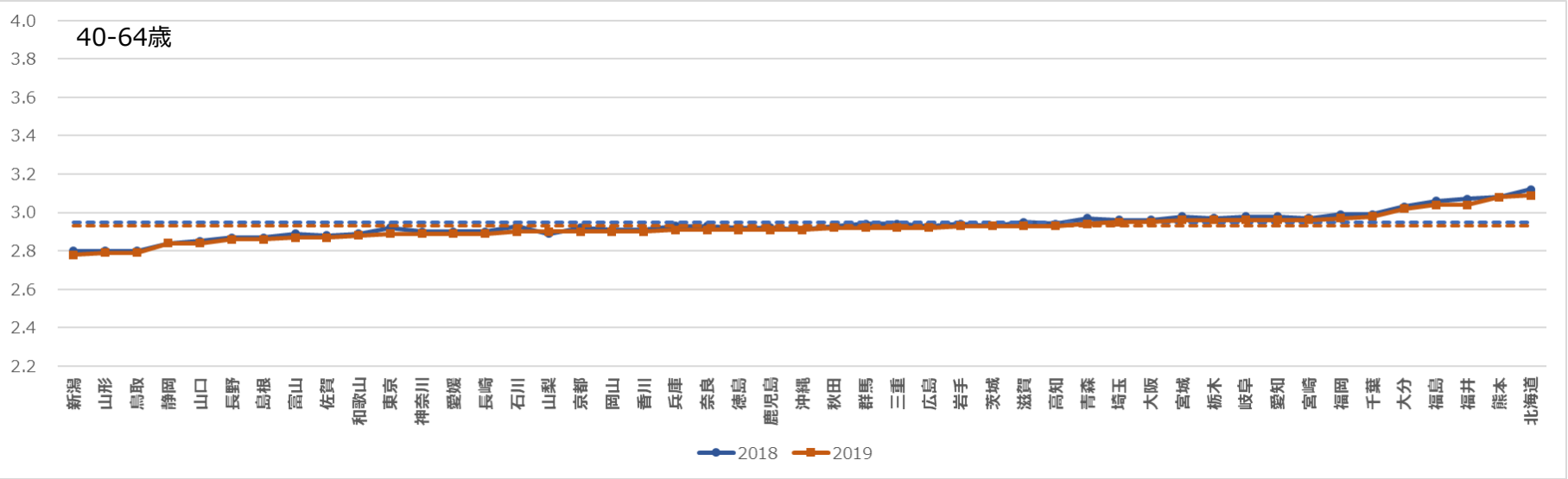


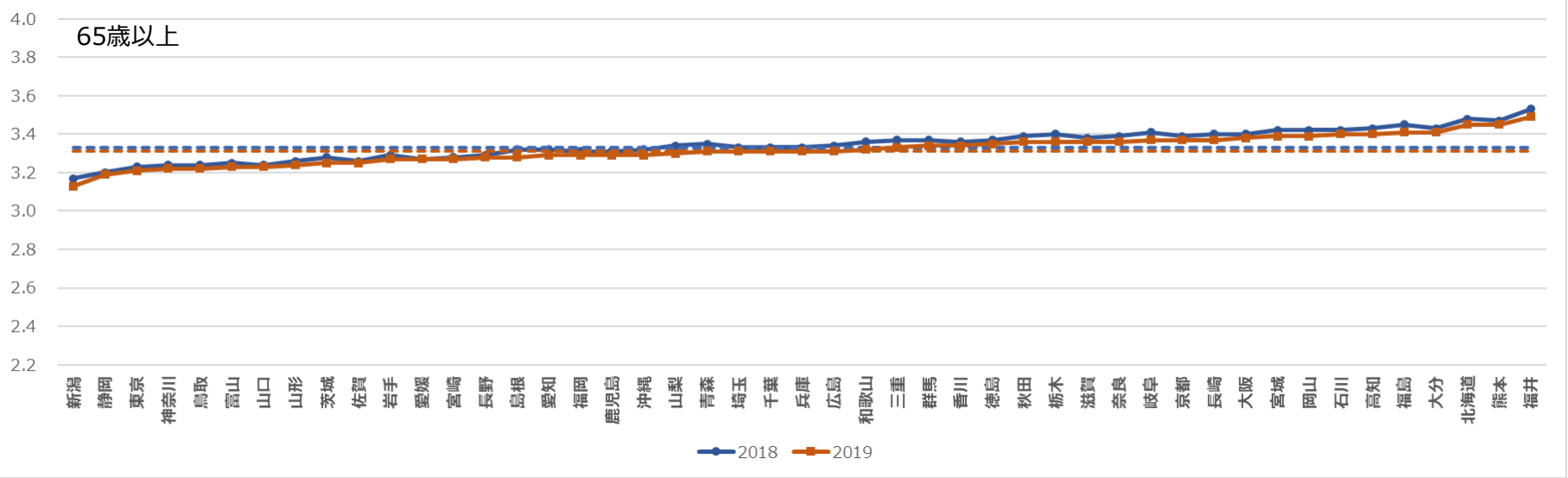

4-6歳
4.0
3.8
3.6
3.4
3.2
3.0
2.8
2.6
2.4
2.2
福井 山形 香川 石川 島根 長野 京都 茨城 奈良 鳥取 岡山 滋賀 栃木 山梨 長崎 富山 沖縄 静岡 佐賀 岩手 東京 宮城 神奈川 岐阜 福島 山口 兵庫 大分 千葉 青森 群馬 和歌山 埼玉 愛知 鹿児島 大阪 高知 愛媛 三重 新潟 徳島 福岡 北海道 宮崎 広島 秋田 熊本
2018
2019


7-12歳
4.0
3.8
3.6
3.4
3.2
3.0
2.8
2.6
2.4
2.2
山形 香川 島根 福井 鳥取 長野 奈良 石川 岡山 長崎 京都 富山 山口 茨城 栃木 佐賀 静岡 山梨 岐阜 滋賀 神奈川 岩手 愛媛 愛知 東京 和歌山 兵庫 三重 大阪 高知 埼玉 新潟 沖縄 鹿児島 宮城 広島 福島 徳島 千葉 群馬 青森 大分 福岡 北海道 宮崎 秋田 熊本
2018
2019


13-18歳
4.0
3.8
3.6
3.4
3.2
3.0
2.8
2.6
2.4
2.2
山形 山口 島根 長野 鳥取 長崎 香川 岡山 広島 新潟 佐賀 石川 富山 高知 奈良 沖縄 神奈川 和歌山 栃木 京都 静岡 愛媛 岩手 宮城 山梨 兵庫 茨城 鹿児島 滋賀 福岡 三重 東京 千葉 群馬 埼玉 大阪 徳島 愛知 青森 大分 福井 福島 秋田 岐阜 北海道 宮崎 熊本
2018
2019


19-39歳
4.0
3.8
3.6
3.4
3.2
3.0
2.8
2.6
2.4
2.2
鳥取 岡山 山口 山形 香川 長崎 新潟 京都 山梨 沖縄 静岡 広島 和歌山 佐賀 奈良 島根 鹿児島 長野 高知 富山 神奈川 愛媛 茨城 兵庫 栃木 石川 東京 大阪 宮城 福岡 徳島 群馬 滋賀 三重 愛知 千葉 埼玉 秋田 岩手 岐阜 青森 大分 福井 福島 宮崎 北海道 熊本
2018
2019





・北海道・熊本・宮崎はどの年代でも薬剤種類数は多く、秋田・広島は小児、福井は40歳以上について多くなっていた。

・若い年代ほど地域差が大きく、年代が上がるにつれ差が小さくなる傾向が見られた。

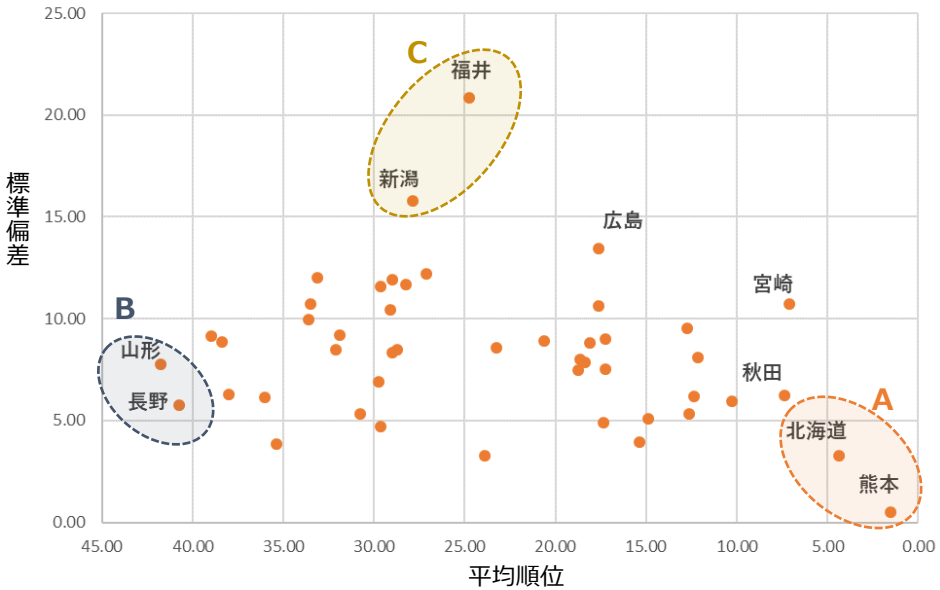
・小児では2019年度は2018年度よりもほとんどの地域で薬剤種類数が減少していた。一方で13歳より上の年代では減少はごく僅かであった。また、各地域の傾向にほとんど変化がなくほぼ固定化されていた。

（参考）2019年度年代別薬剤種類数の順位及び標準偏差

※順位は薬剤種類数が多い方からの順番

	0歳	1-3歳	4-6歳	7-12歳	13-18歳	19-39歳	40-64歳	65歳以上	平均順位	標準偏差
北海道	12	6	5	4	3	2	1	2	4.38	3.28
青森	10	12	18	7	9	7	15	23	12.63	5.31
岩手	8	18	28	26	25	9	16	35	20.63	8.89
宮城	18	31	26	13	24	19	8	8	18.38	7.86
秋田	3	3	2	2	5	10	20	14	7.38	6.24
山形	22	43	46	47	47	44	45	40	41.75	7.77
福島	26	25	23	11	6	4	3	4	12.75	9.54
茨城	40	41	40	34	21	25	16	38	31.88	9.18
栃木	44	40	35	33	29	23	8	14	28.25	11.70
群馬	36	20	17	8	14	16	20	19	18.75	7.50
埼玉	24	23	15	17	13	11	13	23	17.38	4.90
千葉	28	26	19	9	15	12	6	23	17.25	7.55
東京	31	33	27	23	16	21	34	45	28.75	8.47
神奈川	29	30	25	27	31	27	34	43	30.75	5.31
新潟	15	11	8	16	38	41	47	47	27.88	15.78
富山	38	34	32	36	35	28	39	41	35.38	3.87
石川	23	37	44	40	36	22	29	6	29.63	11.56
福井	46	45	47	44	7	5	3	1	24.75	20.83
山梨	25	29	34	30	23	39	29	28	29.63	4.69
長野	47	47	42	42	44	30	41	33	40.75	5.78
岐阜	35	22	24	29	4	8	8	11	17.63	10.64
静岡	39	35	30	31	27	37	43	46	36.00	6.14
愛知	30	21	14	24	10	13	8	29	18.63	8.00
三重	11	7	9	20	17	14	20	21	14.88	5.09
滋賀	45	44	36	28	19	15	16	14	27.13	12.21
京都	41	42	41	37	28	40	29	11	33.63	9.97
大阪	21	16	12	19	12	20	13	10	15.38	3.94
兵庫	32	24	21	21	22	24	24	23	23.88	3.30
奈良	34	39	39	41	33	33	24	14	32.13	8.46
和歌山	42	27	16	22	30	35	38	22	29.00	8.35
鳥取	20	28	38	43	43	47	45	43	38.38	8.86
島根	27	38	43	45	45	32	41	33	38.00	6.26
岡山	33	36	37	39	40	46	29	8	33.50	10.71
広島	4	4	3	12	39	36	20	23	17.63	13.44
山口	19	14	22	35	46	45	43	41	33.13	12.04
徳島	7	5	7	10	11	17	24	18	12.38	6.20
香川	43	46	45	46	41	43	29	19	39.00	9.15
愛媛	17	13	10	25	26	26	34	35	23.25	8.60
高知	14	10	11	18	34	29	16	6	17.25	9.01
福岡	6	8	6	5	18	18	7	29	12.13	8.08
佐賀	9	15	29	32	37	34	39	38	29.13	10.46
長崎	13	19	33	38	42	42	34	11	29.00	11.94
熊本	2	2	1	1	1	1	2	2	1.50	0.50
大分	16	17	20	6	8	6	5	4	10.25	5.93
宮崎	1	1	4	3	2	3	8	35	7.13	10.74
鹿児島	5	9	13	14	20	31	24	29	18.13	8.81
沖縄	37	32	31	15	32	38	24	29	29.75	6.92

薬剤種類数の順位とその標準偏差を用いて、支部の年代ごとの傾向の違いの有無を確認した。



縦軸の標準偏差はバラツキを示すもので、標準偏差が小さい支部はどの年代も同じような順位で、標準偏差が大きい支部は年代ごとの順位の変動が大きい。いくつか特徴のある支部が見られた。

例：A 熊本・北海道はどの年代でも順位が高い（＝薬剤種類数が多い）

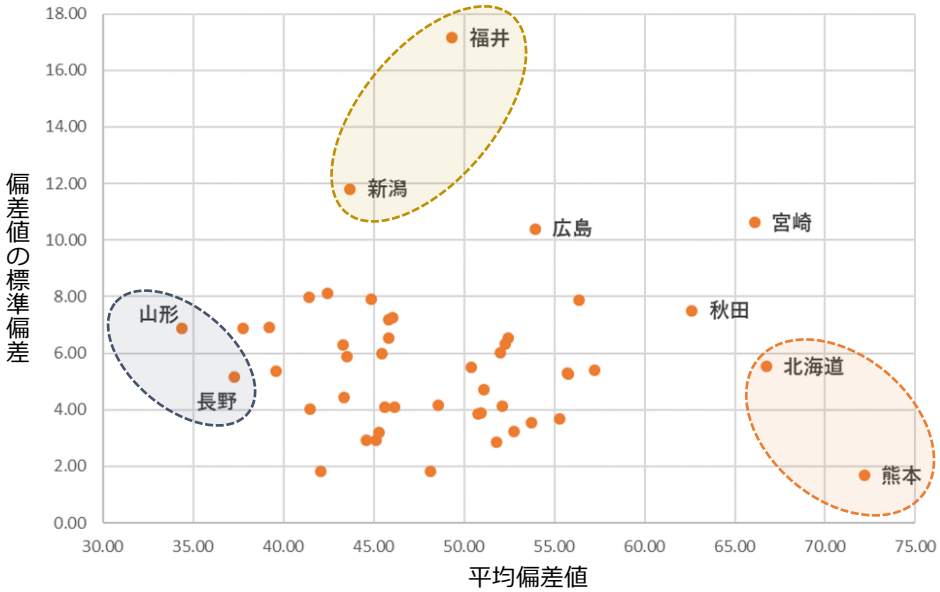
B 山形・長野は比較的どの年代も順位が低い（＝薬剤種類数が少ない）

C 福井・新潟は年代によって順位の変動が大きい

（参考）2019年度年代別薬剤種類数の偏差値及び標準偏差

	0歳	1-3歳	4-6歳	7-12歳	13-18歳	19-39歳	40-64歳	65歳以上	平均偏差値	標準偏差
北海道	55.93	60.96	65.27	70.18	67.76	69.88	74.77	69.07	66.73	5.53
青森	58.32	55.97	51.41	57.98	56.14	61.03	51.55	50.00	55.30	3.67
岩手	59.32	50.77	45.17	47.02	46.95	59.19	50.00	44.55	50.37	5.50
宮城	50.40	45.56	47.27	53.07	46.97	49.97	54.64	60.90	51.10	4.70
秋田	64.59	70.03	70.11	71.71	60.70	58.66	48.45	56.81	62.63	7.51
山形	48.35	37.17	31.27	31.98	25.37	31.89	28.33	40.47	34.35	6.89
福島	46.09	47.23	48.86	54.47	58.72	64.99	67.03	63.62	56.38	7.87
茨城	40.50	37.98	37.82	43.23	49.49	45.90	50.00	41.83	43.34	4.45
栃木	38.62	39.29	39.54	43.90	45.63	48.05	54.64	56.81	45.81	6.53
群馬	43.03	49.05	51.41	56.55	53.67	51.35	48.45	54.09	50.95	3.90
埼玉	47.96	48.41	51.71	51.93	54.05	57.15	53.10	50.00	51.79	2.85
千葉	45.62	47.06	51.24	55.46	53.37	56.53	57.74	50.00	52.13	4.14
東京	45.14	45.01	46.44	48.33	50.74	49.01	43.81	36.38	45.61	4.11
神奈川	45.30	45.58	48.52	46.20	44.13	45.58	43.81	37.74	44.61	2.92
新潟	53.83	55.97	55.62	52.12	39.28	40.51	26.78	25.48	43.70	11.80
富山	41.88	43.26	43.14	42.23	40.71	45.52	40.71	39.10	42.07	1.84
石川	48.00	42.34	35.03	37.71	39.99	48.18	45.36	62.26	44.86	7.92
福井	31.52	34.70	29.91	34.97	57.99	64.08	67.03	74.52	49.34	17.16
山梨	47.26	45.92	39.55	44.40	48.10	41.91	45.36	48.64	45.14	2.92
長野	30.44	33.61	36.02	35.22	33.32	44.53	39.16	45.91	37.28	5.15
岐阜	43.04	48.44	48.74	45.35	60.89	60.40	54.64	58.17	52.46	6.53
静岡	41.75	43.15	44.80	44.16	45.66	42.32	36.07	33.65	41.44	4.03
愛知	45.14	48.89	51.73	47.61	55.70	55.28	54.64	47.28	50.79	3.84
三重	57.74	59.46	55.50	51.03	50.37	54.72	48.45	52.72	53.75	3.54
滋賀	37.90	35.27	38.72	46.10	49.98	51.61	50.00	56.81	45.80	7.19
京都	40.29	37.48	37.74	40.84	45.64	40.88	45.36	58.17	43.30	6.29
大阪	49.17	50.99	53.82	51.42	54.98	49.09	53.10	59.53	52.76	3.23
兵庫	44.79	48.35	49.91	50.38	48.30	46.60	46.90	50.00	48.15	1.83
奈良	44.08	39.76	37.83	37.28	41.55	43.74	46.90	56.81	43.49	5.89
和歌山	40.18	46.35	51.48	49.92	45.26	42.50	42.26	51.36	46.16	4.10
鳥取	49.75	46.32	38.31	35.06	36.89	29.70	28.33	37.74	37.76	6.89
島根	45.71	42.30	35.43	33.40	31.13	43.84	39.16	45.91	39.61	5.37
岡山	44.30	42.55	38.64	38.31	38.32	31.18	45.36	60.90	42.44	8.12
広島	64.56	67.11	66.72	53.64	38.52	42.44	48.45	50.00	53.93	10.40
山口	50.33	51.43	49.67	43.12	29.92	31.76	36.07	39.10	41.43	7.98
徳島	61.25	64.63	57.30	55.23	55.03	50.28	46.90	55.45	55.76	5.25
香川	38.82	34.08	31.91	32.72	38.26	38.47	45.36	54.09	39.21	6.91
愛媛	50.96	55.28	54.44	47.38	46.26	45.72	43.81	44.55	48.55	4.17
高知	55.74	57.85	54.03	51.77	41.22	45.52	50.00	62.26	52.30	6.32
福岡	62.33	59.03	59.86	60.43	50.25	50.26	56.19	47.28	55.70	5.31
佐賀	58.64	51.04	44.90	43.96	39.46	42.90	40.71	41.83	45.43	5.98
長崎	55.91	50.20	43.06	38.88	38.19	40.17	43.81	58.17	46.05	7.27
熊本	74.79	72.47	70.47	72.41	73.37	71.64	73.22	69.07	72.18	1.67
大分	51.36	50.90	50.26	58.12	57.96	61.88	63.93	63.62	57.25	5.38
宮崎	79.18	76.25	66.45	70.41	68.54	68.76	54.64	44.55	66.10	10.61
鹿児島	63.64	58.80	52.11	52.76	49.95	44.52	46.90	47.28	51.99	6.03
沖縄	41.97	45.02	43.20	52.13	43.60	42.21	46.90	47.28	45.29	3.18

薬剤種類数の偏差値とその標準偏差を用いて、前頁同様に支部の年代ごとの傾向の違いの有無を確認した。



結果は前頁とほぼ同じ傾向が確認された。

（３）平均処方薬剤種類数と急性上気道炎に対する抗菌薬処方割合との関係

・薬剤種類数について、小児ではいわゆる風邪による受診や投薬がその多くの割合を占めることから、抗菌薬の使用状況に影響を受ける可能性がある。そこで、協会けんぽで昨年度実施した、「急性上気道炎に対する抗菌薬処方割合」についての分析結果と今回の薬剤種類数との関係について分析を行った。

①急性上気道炎に対する抗菌薬処方割合（2018年度）

	0歳	1-3歳	4-6歳	7-12歳	13-19歳	20-39歳	40-64歳	65歳以上
北海道	12.3%	22.6%	24.5%	24.6%	28.0%	32.0%	27.9%	22.4%
青森	15.2%	26.3%	28.8%	31.5%	35.8%	38.9%	34.0%	27.1%
岩手	13.1%	20.8%	24.0%	25.8%	31.4%	39.1%	33.8%	29.3%
宮城	14.5%	23.3%	27.1%	29.8%	36.5%	42.5%	37.8%	31.0%
秋田	16.5%	24.6%	26.4%	27.7%	32.6%	36.8%	32.6%	26.6%
山形	15.4%	23.6%	24.6%	26.8%	31.7%	41.2%	35.3%	28.7%
福島	8.6%	18.6%	26.3%	28.5%	36.3%	43.0%	38.7%	31.5%
茨城	11.4%	21.4%	24.5%	28.1%	34.0%	39.4%	35.9%	28.9%
栃木	9.3%	18.9%	22.9%	24.7%	30.1%	35.8%	31.9%	26.9%
群馬	6.5%	15.1%	19.5%	22.9%	33.5%	38.2%	35.1%	30.6%
埼玉	10.3%	19.6%	25.1%	27.5%	33.9%	39.9%	35.7%	28.4%
千葉	11.2%	18.8%	22.2%	23.6%	30.6%	37.5%	34.2%	28.0%
東京	10.1%	18.8%	22.5%	25.2%	33.2%	39.3%	35.7%	28.9%
神奈川	10.9%	19.6%	22.3%	24.8%	33.0%	38.4%	34.3%	28.8%
新潟	14.0%	24.9%	29.1%	31.6%	37.3%	42.3%	37.6%	30.7%
富山	9.4%	21.3%	29.3%	29.2%	35.5%	42.5%	37.7%	31.1%
石川	8.9%	17.3%	24.8%	25.2%	30.0%	39.2%	34.6%	27.3%
福井	6.8%	15.2%	19.3%	20.8%	27.8%	32.0%	28.6%	23.4%
山梨	14.1%	26.1%	28.6%	32.5%	41.6%	45.2%	40.2%	33.4%
長野	8.8%	20.3%	28.9%	29.8%	31.3%	36.6%	33.7%	27.6%
岐阜	11.1%	22.1%	27.7%	30.6%	37.9%	40.4%	36.1%	29.0%
静岡	10.0%	22.2%	26.3%	28.3%	34.6%	40.3%	34.7%	27.3%
愛知	9.3%	18.8%	23.6%	25.1%	32.2%	35.9%	31.0%	24.0%
三重	17.4%	31.2%	33.9%	35.5%	40.1%	45.3%	40.1%	32.9%
滋賀	11.6%	20.8%	24.8%	27.2%	32.9%	39.4%	34.9%	27.2%
京都	10.8%	19.6%	24.9%	27.2%	34.1%	38.2%	34.7%	28.2%
大阪	12.4%	21.7%	27.7%	31.5%	40.7%	43.4%	39.6%	31.3%
兵庫	10.5%	21.0%	25.3%	28.3%	39.0%	43.3%	38.9%	30.6%
奈良	21.2%	32.6%	36.0%	40.1%	49.7%	53.5%	47.5%	39.3%
和歌山	13.1%	22.6%	34.8%	39.5%	49.0%	52.8%	48.8%	39.9%
鳥取	12.0%	19.7%	21.4%	24.4%	30.8%	38.4%	34.8%	30.1%
島根	11.8%	22.8%	23.4%	24.7%	29.8%	36.6%	32.7%	29.9%
岡山	14.5%	25.8%	26.6%	29.5%	37.4%	42.8%	37.9%	31.4%
広島	15.9%	26.0%	30.9%	32.0%	39.7%	43.0%	38.5%	30.1%
山口	24.5%	35.8%	35.5%	35.1%	37.1%	42.6%	37.1%	28.3%
徳島	25.4%	36.6%	39.7%	42.0%	47.0%	52.3%	45.3%	35.5%
香川	16.9%	26.7%	27.4%	29.7%	38.8%	44.0%	40.1%	33.1%
愛媛	16.7%	30.5%	32.7%	35.5%	44.5%	48.5%	43.7%	35.9%
高知	18.6%	33.6%	46.7%	44.2%	39.8%	39.9%	36.6%	28.9%
福岡	16.0%	26.4%	28.2%	31.1%	40.1%	45.7%	40.6%	31.5%
佐賀	15.6%	25.2%	23.6%	26.4%	38.0%	45.0%	40.9%	32.9%
長崎	19.8%	29.7%	32.5%	34.2%	42.3%	48.9%	43.6%	34.3%
熊本	16.0%	25.4%	27.9%	32.5%	42.2%	48.2%	41.2%	32.4%
大分	14.9%	23.6%	21.9%	26.0%	34.1%	38.7%	33.3%	23.9%
宮崎	26.2%	36.9%	36.7%	40.3%	45.6%	48.4%	44.8%	35.4%
鹿児島	22.7%	32.5%	30.2%	31.9%	41.3%	44.7%	40.7%	33.9%
沖縄	18.5%	30.8%	26.9%	26.5%	31.4%	36.8%	33.4%	26.6%
全国	12.9%	22.7%	26.2%	28.4%	35.7%	40.7%	36.4%	29.2%

②平均処方薬剤種類数（2018年度）

	0歳	1-3歳	4-6歳	7-12歳	13-18歳	19-39歳	40-64歳	65歳以上
北海道	3.15	3.72	3.48	2.91	2.70	2.83	3.12	3.48
青森	3.24	3.61	3.22	2.78	2.62	2.76	2.97	3.35
岩手	3.15	3.48	3.10	2.62	2.51	2.73	2.94	3.29
宮城	3.03	3.38	3.18	2.73	2.50	2.65	2.98	3.42
秋田	3.41	3.88	3.51	2.95	2.62	2.72	2.93	3.39
山形	3.05	3.27	2.97	2.54	2.33	2.54	2.80	3.26
福島	2.96	3.41	3.20	2.74	2.59	2.78	3.06	3.45
茨城	2.82	3.24	3.03	2.63	2.53	2.62	2.93	3.28
栃木	2.77	3.26	3.07	2.63	2.50	2.65	2.97	3.40
群馬	2.86	3.44	3.20	2.75	2.56	2.68	2.94	3.37
埼玉	2.95	3.43	3.23	2.73	2.58	2.72	2.96	3.33
千葉	2.93	3.42	3.23	2.76	2.58	2.71	2.99	3.33
東京	2.94	3.38	3.18	2.70	2.55	2.67	2.92	3.23
神奈川	2.94	3.39	3.19	2.68	2.50	2.63	2.90	3.24
新潟	3.19	3.61	3.29	2.73	2.45	2.62	2.80	3.17
富山	2.92	3.40	3.12	2.60	2.47	2.64	2.89	3.25
石川	3.01	3.34	3.00	2.57	2.46	2.66	2.93	3.42
福井	2.72	3.21	2.98	2.56	2.63	2.80	3.07	3.53
山梨	2.89	3.32	3.00	2.57	2.47	2.59	2.89	3.34
長野	2.63	3.15	2.99	2.49	2.39	2.62	2.87	3.29
岐阜	2.96	3.47	3.20	2.65	2.62	2.75	2.98	3.41
静岡	2.82	3.30	3.08	2.60	2.48	2.60	2.84	3.20
愛知	2.96	3.46	3.23	2.68	2.58	2.72	2.98	3.32
三重	3.15	3.63	3.25	2.70	2.55	2.72	2.94	3.37
滋賀	2.72	3.17	3.01	2.64	2.51	2.69	2.95	3.38
京都	2.81	3.23	3.02	2.58	2.49	2.60	2.92	3.39
大阪	3.03	3.50	3.27	2.73	2.57	2.67	2.96	3.40
兵庫	2.93	3.46	3.20	2.71	2.53	2.65	2.93	3.33
奈良	2.94	3.31	3.06	2.58	2.48	2.63	2.93	3.39
和歌山	2.91	3.43	3.20	2.64	2.48	2.61	2.89	3.36
鳥取	3.06	3.41	3.01	2.54	2.44	2.54	2.80	3.24
島根	2.98	3.35	2.98	2.51	2.36	2.63	2.87	3.32
岡山	2.96	3.36	3.04	2.55	2.40	2.54	2.91	3.42
広島	3.36	3.78	3.41	2.71	2.46	2.61	2.93	3.34
山口	3.08	3.50	3.19	2.62	2.36	2.53	2.85	3.24
徳島	3.24	3.68	3.26	2.66	2.52	2.65	2.92	3.37
香川	2.79	3.18	2.95	2.51	2.42	2.59	2.91	3.36
愛媛	3.06	3.58	3.24	2.64	2.48	2.61	2.90	3.27
高知	3.23	3.64	3.20	2.62	2.43	2.62	2.94	3.43
福岡	3.30	3.62	3.32	2.79	2.55	2.67	2.99	3.31
佐賀	3.27	3.48	3.11	2.62	2.44	2.62	2.88	3.26
長崎	3.18	3.44	3.06	2.53	2.42	2.59	2.90	3.40
熊本	3.58	3.89	3.48	2.92	2.74	2.82	3.08	3.47
大分	3.05	3.44	3.12	2.69	2.59	2.75	3.03	3.43
宮崎	3.78	3.96	3.41	2.90	2.71	2.79	2.97	3.28
鹿児島	3.32	3.58	3.19	2.70	2.53	2.62	2.92	3.31
沖縄	2.94	3.40	3.06	2.67	2.43	2.58	2.91	3.32
総計	3.05	3.47	3.20	2.69	2.54	2.67	2.95	3.33

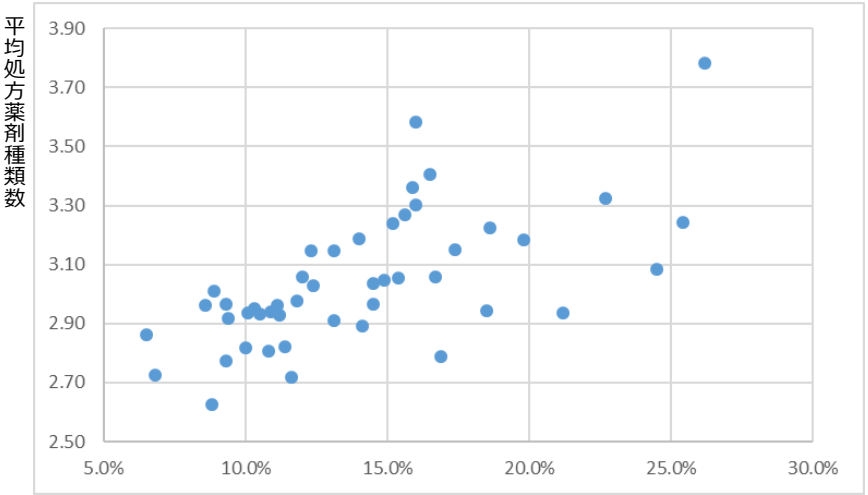
※表の赤は各年代の上位5支部、緑は下位5支部。 一部年代区分が相違している。

・前頁の①と②について相関係数を計算すると以下のようになる。

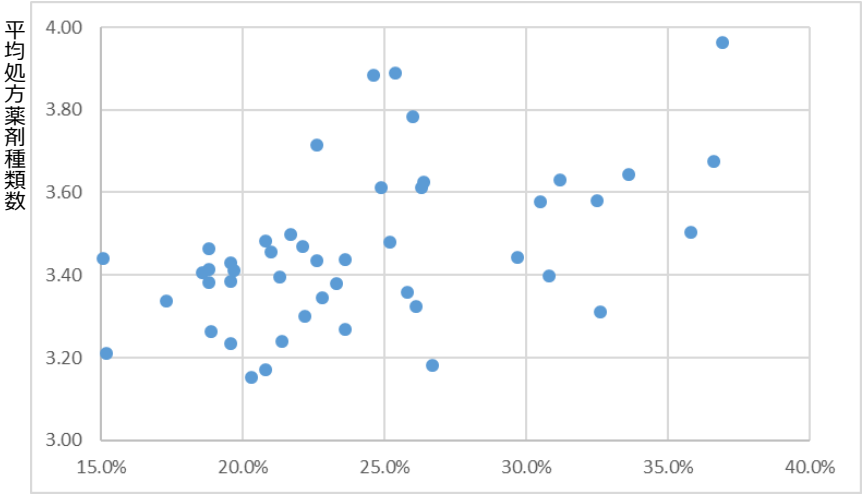
	0歳	1-3歳	4-6歳	7-12歳	13-18歳 （13-19歳）	19-39歳 （20-39歳）	40-64歳	65歳以上
相関係数	0.65	0.49	0.26	0.06	0.03	-0.22	-0.21	-0.14

0歳は高い相関が見られ、1-3歳についてはやや相関が見られた。

散布図
（０歳）



散布図
（1-3歳）



（参考）　年齢階級別_主傷病別_外来レセプト件数上位5件（2018年度_医療費基本情報より）

0-9歳

1	喘息	11.2%
2	その他の急性上気道感染症	11.1%
3	皮膚炎及び湿疹	10.0%
4	アレルギー性鼻炎	7.6%
5	急性気管支炎及び急性細気管支炎	7.5%

10-19歳

	屈折及び調節の障害	9.5%
	アレルギー性鼻炎	9.4%
	その他の損傷及びその他の外因の影響	7.0%
	皮膚炎及び湿疹	6.9%
	その他の皮膚及び皮下組織の疾患	6.9%

20-29歳

	皮膚炎及び湿疹	7.9%
	屈折及び調節の障害	7.8%
	その他の皮膚及び皮下組織の疾患	6.6%
	その他の急性上気道感染症	6.0%
	アレルギー性鼻炎	5.5%

30-39歳

1	皮膚炎及び湿疹	6.4%
2	アレルギー性鼻炎	5.9%
3	その他の急性上気道感染症	5.8%
4	屈折及び調節の障害	5.2%
5	その他の皮膚及び皮下組織の疾患	4.4%

40-49歳

	高血圧性疾患	7.3%
	皮膚炎及び湿疹	4.8%
	アレルギー性鼻炎	4.6%
	屈折及び調節の障害	4.2%
	その他の皮膚及び皮下組織の疾患	3.8%

50-59歳

	高血圧性疾患	16.1%
	糖尿病	5.3%
	脂質異常症	5.2%
	屈折及び調節の障害	3.2%
	皮膚炎及び湿疹	3.1%

60-69歳

1	高血圧性疾患	21.9%
2	糖尿病	6.9%
3	脂質異常症	6.5%
4	その他の眼及び付属器の疾患	3.2%
5	関節症	2.8%

70歳以上

	高血圧性疾患	22.8%
	糖尿病	7.4%
	脂質異常症	5.8%
	その他の眼及び付属器の疾患	3.4%
	関節症	3.3%

※右端の数値は全体の件数に占める割合

【まとめ】

薬剤種類数の地域差については、年代によって違いがあり、6歳以下の年代については大きな地域差が見られた一方で、年代が上がるにつれ地域差は縮小していった。また、経年の変化も同様に年代が上がるほど縮小していた。

昨年度実施した、「急性上気道炎に対する抗菌薬処方割合」についての分析結果と今回の薬剤種類数との関係については、0歳と1-3歳の年代について相関が見られた。小児は感染症に対する投薬が中心となる一方、年代が上がると慢性疾患に対する投薬が多くなることが理由として考えられる。

地域の処方薬剤数に差が生じる要因は様々あると思われるが、いわゆる風邪に対する抗菌薬の処方動向も年代によっては寄与しているものと思われる。

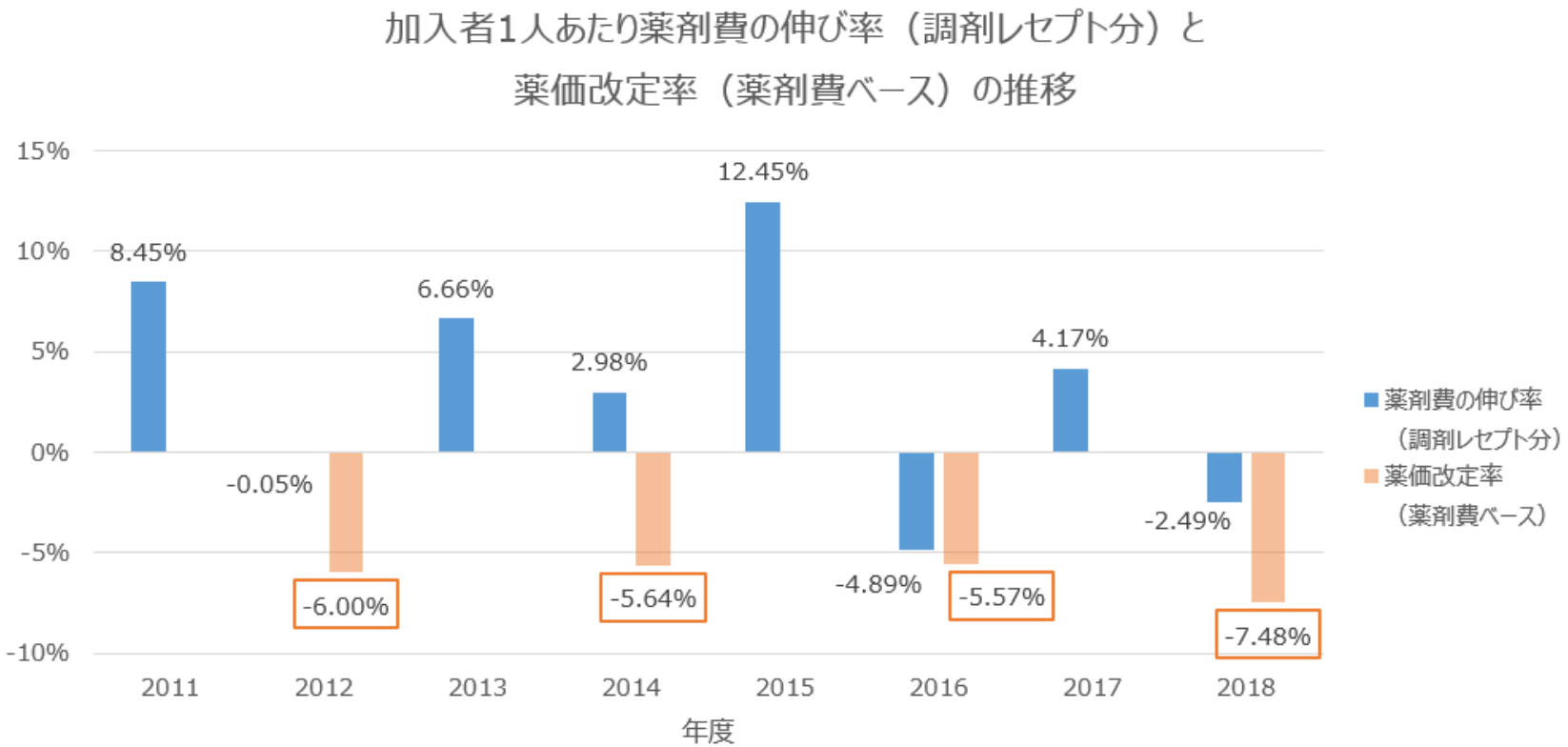
また、抗菌薬使用割合が近年減少傾向にあるが、このことが薬剤種類数の減少の一因となっている可能性が考えられる。

協会けんぽの薬剤費の構造と薬価改定の影響に関する分析

【 目的 】

2年毎に行われる診療報酬改定では、医療費の伸びを抑える為、薬価の減額改定が恒例となっている。

しかし、加入者1人あたり**薬剤費は薬価改定率ほど下がらないことが多い**ことから、減額改定の効果は次々と保険適用される新薬によって相殺されていると考えられる。効果の高い新薬の保険適用は患者にとって望ましいが、画期的な新薬がある一方で、新規性に乏しい新薬もあるのが現状である。



※ 加入者1人あたり薬剤費（調剤レセプト分）は、協会けんぽ調剤基本情報と加入者基本情報（月平均加入者数）より算出。

本研究では、2018年4月の薬価改定（薬剤費ベースで▲7.48%）前後の各1年間の薬剤費について、**薬価の減額改定の効果が、どのような新薬によって相殺されているのか**を検討したので、その結果を報告する。

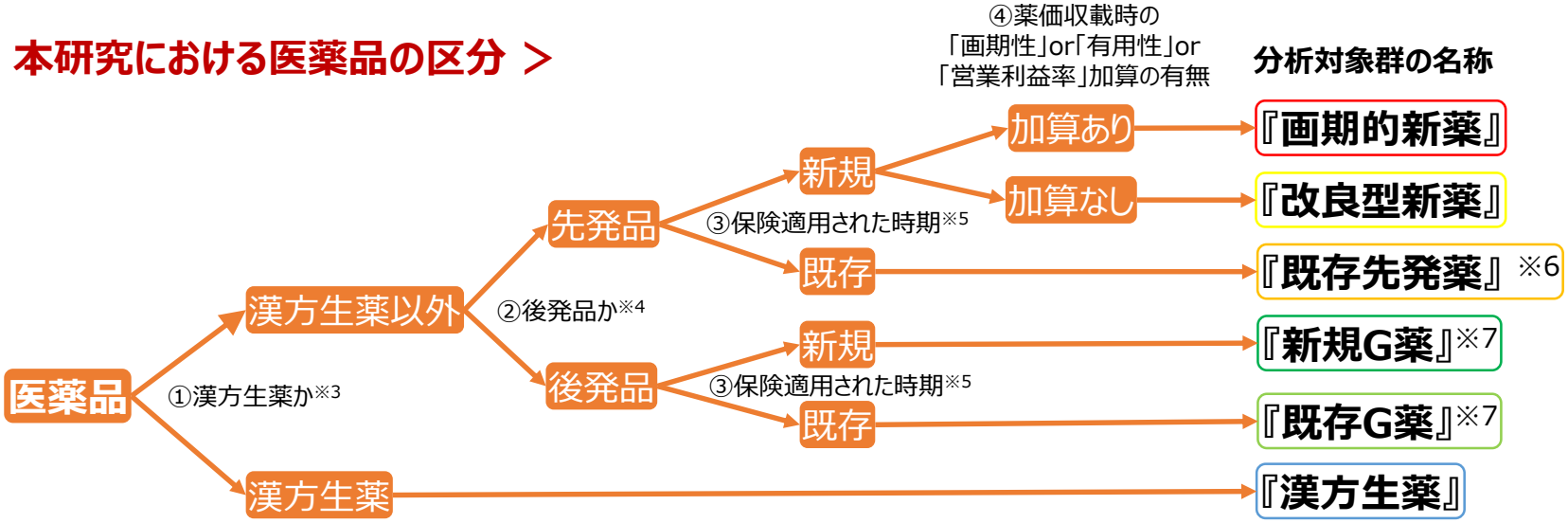
【 方法 】

2017～2018年度の協会けんぽ加入者のレセプト※1に記載された医薬品を下図の手順で6群に区分し、加入者1人あたり数量※2と薬剤費（＝薬価×数量）を両年度で比較した。

又、医薬品の薬効大分類（8区分）別、薬価階級（7区分）別にも集計し、各群の特徴を検討した。

今回の分析では、**「画期性」・「有用性」・「営業利益率」加算の有る新規の先発品を『画期的新薬』、それ以外の新規の先発品を『改良型新薬』**と定義して区分した。

＜ 本研究における医薬品の区分 ＞



※1 調剤レセプトの他、医科レセプト（DPC出来高分を含む）と歯科レセプトも分析対象とした。
※2 薬価収載時の基準単位。
※3 薬価基準コードの先頭1桁（薬効大分類）が「5」の医薬品（＝漢方薬と生薬が含まれ、先発品・後発品の概念が無い）。
※4 厚生労働省ホームページの医薬品マスターの後発品フラグで判別。
※5 厚生労働省ホームページの医薬品マスターに新規登録された年月で判別（その為、いわゆる報告品目等も「新規」に含む）。
「新規」＝薬価改定の前後1年以内＝2017年4月～2019年3月、「既存」＝それ以前＝～2017年3月。
※6 上記5の定義で区分した為、いわゆる長期収載品だけでなく、まだ特許期間中の先発品も含まれる。
※7 後発品（いわゆるジェネリック医薬品）を略して『G薬』と表記。

（ 参考 ）

「画期性」・「有用性」・「営業利益率」の加算の概要と具体例

・「画期性加算」　…次の要件を全て満たす新薬（殆ど無い）。
　・臨床上有用な新規作用機序を持つこと。
　・類似薬より高い有効性、安全性が客観的に示されていること。
　・治療法の改善が客観的に示されていること。
・「有用性加算(I)」…画期性加算の要件の内2つを満たす新薬。
・「有用性加算(II)」…画期性加算の要件の内1つ又は次の要件を満たす新薬。
　・製剤の工夫により類似薬より高い医療上の有用性を持つことが客観的に示されていること。
・「営業利益率加算」…2017年以前に原価計算方式で用いられた加算（2018年以降は上記の加算に統一）。

尚、今回の分析対象とした新薬（2017年4月～2019年3月に新規保険適用された医薬品）の中で、上記の加算が有った（＝今回の分析で『画期的新薬』に区分した）上位10品目（薬剤費ベース）は以下の通り。

①『マヴィレット配合錠』…… 有用性加算(II) …2017.11.22～　…抗ウイルス剤（C型肝炎）
②『ゾフルーザ錠20mg』…… 有用性加算(II) …2018.03.14～　…抗ウイルス剤（インフルエンザ）
③『スピンラザ髄注12mg』……営業利益率加算…2017.08.30～　…中枢神経用薬（脊髄性筋萎縮症）
④『イブランスカプセル25mg』……営業利益率加算…2017.11.22～　…腫瘍用薬（乳癌）
⑤『イブランスカプセル125mg』……営業利益率加算…2017.11.22～　…腫瘍用薬（乳癌）
⑥『リムパーザ錠150mg』……有用性加算(II) …2018.04.18～　…腫瘍用薬（卵巣癌）
⑦『デュピクセント皮下注300mg』…有用性加算(I)　…2018.04.18～　…アレルギー用薬（アトピー性皮膚炎）
⑧『イミフィンジ点滴静注120mg』…有用性加算(II) …2018.08.29～　…腫瘍用薬（肺癌）
⑨『イミフィンジ点滴静注500mg』…有用性加算(II) …2018.08.29～　…腫瘍用薬（肺癌）
⑩『ヘムライブラ皮下注90mg』……有用性加算(I)　…2018.05.22～　…血液製剤（血友病）

【 結果 】
（1）各群の品目数・数量・薬剤費（2年間の合計）

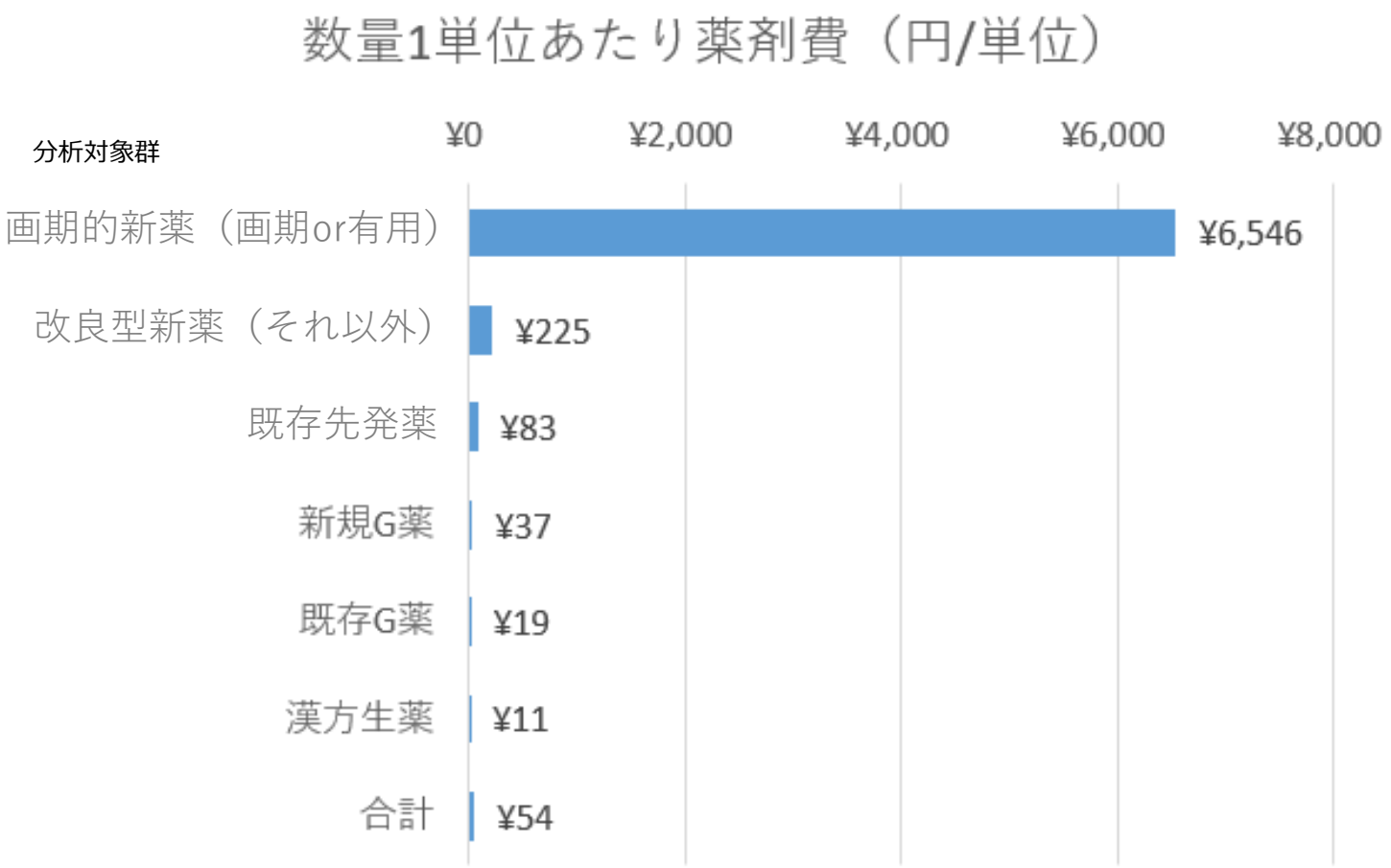
・ 今回の分析対象である2017年4月～2019年3月の2年間の合計では、以下の通り。薬剤費の大半は「既存先発薬」。

分析対象群	品目数※1（構成比）	数量※2（構成比）	薬剤費※2（構成比）	具体例（薬剤費ベースで多い順）
『画期的新薬』	38 (0.2%)	8,141,745 (0.01%)	¥53,297,744,222 (1.7%)	①マヴィレット配合錠（約277億円） ②ゾフルーザ錠20mg（約71億円） ③スピンラザ髄注12mg（約40億円） ④イブランスカプセル25mg（約32億円） ⑤イブランスカプセル125mg（約26億円）
『改良型新薬』	245 (1.2%)	292,724,734 (0.5%)	¥65,772,471,045 (2.1%)	①リリカＯＤ錠75mg（約79億円） ②リリカＯＤ錠25mg（約48億円） ③ヒュミラ皮下注40mgペン0.4mL（約42億円） ④カナリア配合錠（約32億円） ⑤ホスレノールＯＤ錠250mg（約30億円）
『既存先発薬』	7,243 (35.2%)	30,471,014,861 (51.9%)	¥2,515,044,696,524 (79.6%)	①レミケード点滴静注用100mg（約467億円） ②アバスチン点滴静注用400mg/16mL（約268億円） ③ヒュミラ皮下注40mgシリンジ0.4mL（約228億円） ④シナジス筋注液100mg（約221億円） ⑤ネキシウムカプセル20mg（約215億円）
『新規G薬』	1,429 (6.9%)	1,834,946,791 (3.1%)	¥67,275,731,589 (2.1%)	①モンテルカスト錠10mg「KM」（約72億円） ②ジエノゲスト錠1mg「モチダ」（約40億円） ③ロスバスタチン錠2.5mg「DSEP」（約32億円） ④オルメサルタンOD錠20mg「DSEP」（約26億円） ⑤ロスバスタチン錠5mg「DSEP」（約18億円）
『既存G薬』	9,688 (47.0%)	20,765,142,046 (35.4%)	¥399,868,135,085 (12.6%)	①メチコバール錠500μg（約45億円） ②ﾌｪｷｿﾌｪﾅｼﾞﾝ塩酸塩錠60mg「SANIK」（約35億円） ③クロピドグレル錠75mg「SANIK」（約28億円） ④ﾍﾊﾟﾘﾝ類似物質油性ｸﾘｰﾑ0.3%「日医工」（約27億円） ⑤タクロリムスカプセル1mg「ファイザー」（約26億円）
『漢方生薬』	1,950 (9.5%)	5,368,711,411 (9.1%)	¥60,089,645,841 (1.9%)	①ツムラ加味逍遙散エキス顆粒（約30億円） ②ツムラ補中益気湯エキス顆粒（約24億円） ③ツムラ大建中湯エキス顆粒（約21億円） ④ツムラ六君子湯エキス顆粒（約21億円） ⑤ツムラ麦門冬湯エキス顆粒（約20億円）
計	20,593 (100%)	58,740,681,587 (100%)	¥3,161,348,424,307 (100%)	

※1 実際に加入者のレセプトに記載された品目のみ。　※2「1」未満の端数あり（以降のスライドも同様）。

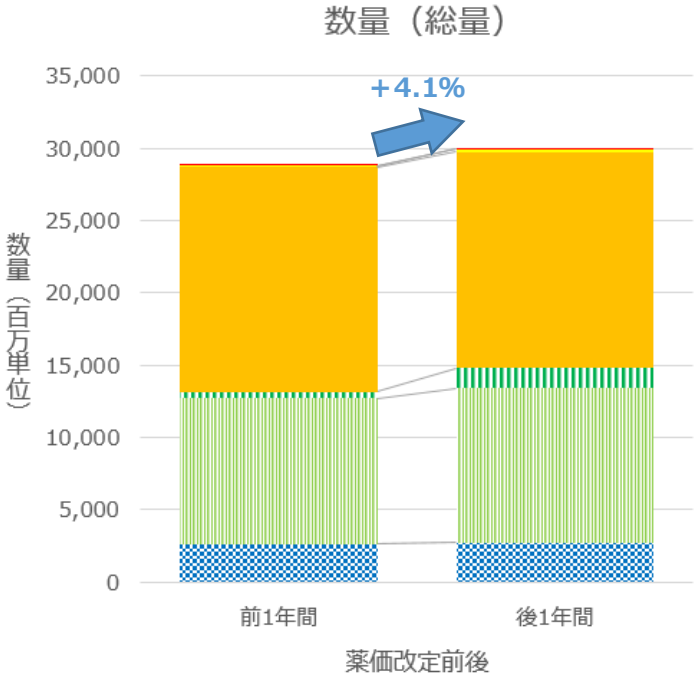
（2）各群の数量１単位あたり薬剤費（2年間の合計）

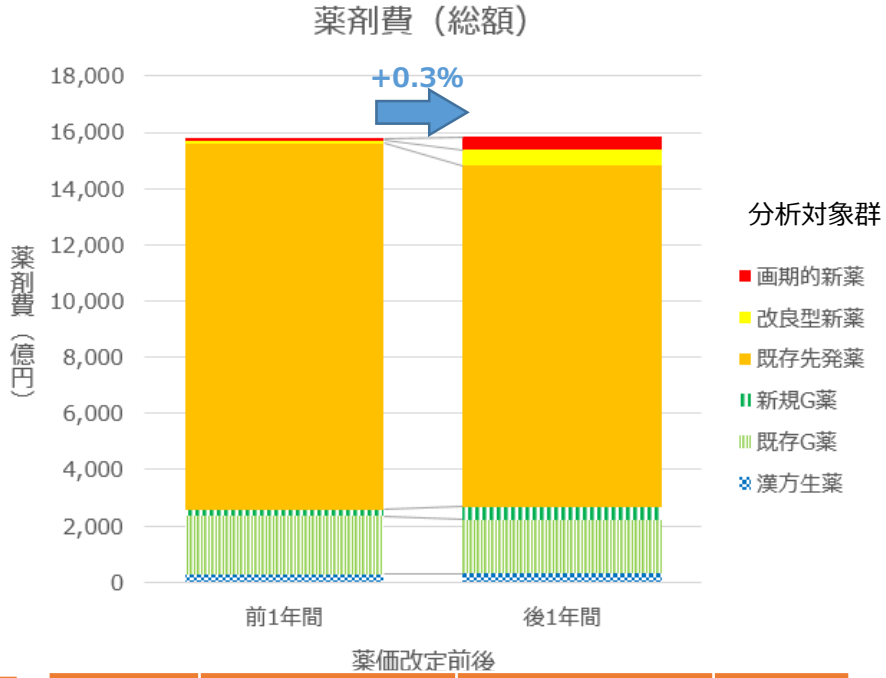
・数量１単位あたり薬剤費は、「画期的新薬」が突出して高額（「既存先発薬」の約80倍）であった。
・「改良型新薬」でも「既存先発薬」の約3倍であった。
・「新規G薬」、「既存G薬」、「漢方生薬」は、いずれも「既存先発薬」の半額以下であった。



（3）各群の薬価改定前後の数量・薬剤費（総量・総額）

- 協会全体の数量は、加入者数の増加（＋約1.5%）の影響も受け、改定後は改定前より約4.1%増加した。
- 協会全体の薬剤費は、加入者数の増加（上記）にも関わらず、改定後も改定前より約0.3%の増加に留まった。





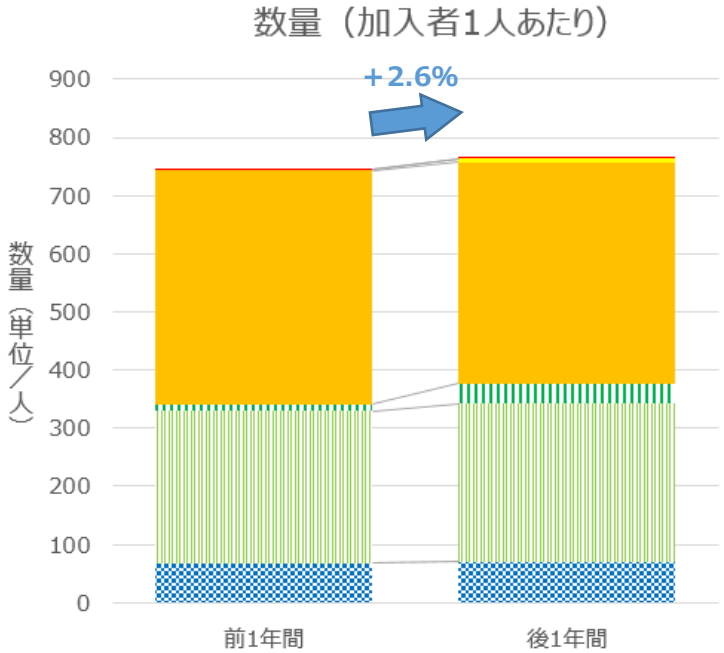
分析対象群	前1年間	後1年間	伸び率
画期的新薬	513,071	7,628,673	1386.9%
改良型新薬	67,087,919	225,636,814	236.3%
既存先発薬	15,535,248,321	14,935,766,540	▲3.9%
新規G薬	457,426,108	1,377,520,684	201.1%
既存G薬	10,110,371,171	10,654,770,875	5.4%
漢方生薬	2,611,099,840	2,757,611,570	5.6%
計	28,781,746,431	29,958,935,157	4.1%
加入者数	38,668,651	39,236,181	1.5%

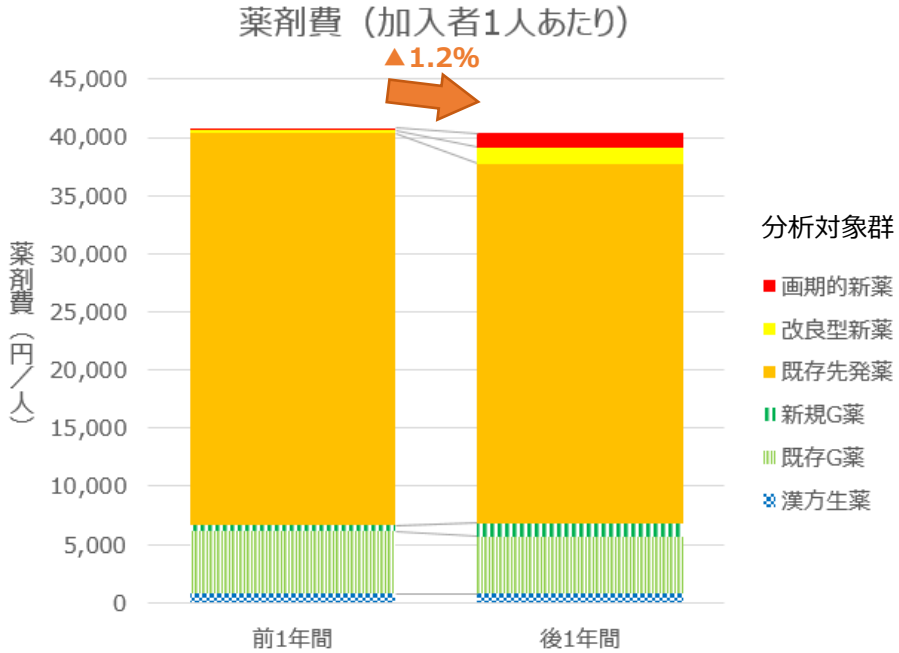
分析対象群	前1年間	後1年間	伸び率
画期的新薬	¥7,349,657,573	¥45,948,086,649	525.2%
改良型新薬	¥10,366,835,006	¥55,405,636,039	434.5%
既存先発薬	¥1,302,833,070,302	¥1,212,211,626,222	▲7.0%
新規G薬	¥21,546,285,029	¥45,729,446,560	112.2%
既存G薬	¥206,867,656,002	¥193,000,479,083	▲6.7%
漢方生薬	¥29,511,784,549	¥30,577,861,292	3.6%
計	¥1,578,475,288,462	¥1,582,873,135,844	0.3%
加入者数	38,668,651	39,236,181	1.5%

※ 加入者数は協会けんぽ加入者基本情報より（月平均）。

（4）各群の薬価改定前後の数量・薬剤費（加入者1人あたり）

- 薬価改定後は改定前より加入者１人あたり数量は合計で約2.6%増加し、薬剤費は約1.2%減少した。
- 数量は「既存先発薬」が減少し、それ以外は増加。薬剤費は「既存先発薬」と「既存G薬」が減少し、それ以外は増加。





分析対象群	前1年間	後1年間	差	伸び率
画期的新薬	0.01	0.19	0.18	1365.4%
改良型新薬	1.73	5.75	4.02	231.5%
既存先発薬	401.8	380.7	▲21.1	▲5.2%
新規G薬	11.8	35.1	23.3	196.8%
既存G薬	261.5	271.6	10.1	3.9%
漢方生薬	67.5	70.3	2.8	4.1%
計	744.3	763.6	19.2	2.6%

分析対象群	前1年間	後1年間	差	伸び率
画期的新薬	¥190	¥1,171	¥981	516.1%
改良型新薬	¥268	¥1,412	¥1,144	426.7%
既存先発薬	¥33,692	¥30,895	▲¥2,797	▲8.3%
新規G薬	¥557	¥1,165	¥608	109.2%
既存G薬	¥5,350	¥4,919	▲¥431	▲8.1%
漢方生薬	¥763	¥779	¥16	2.1%
計	¥40,821	¥40,342	▲¥478	▲1.2%

（5）薬効大分類別の品目数・数量・薬剤費（2年間の合計）

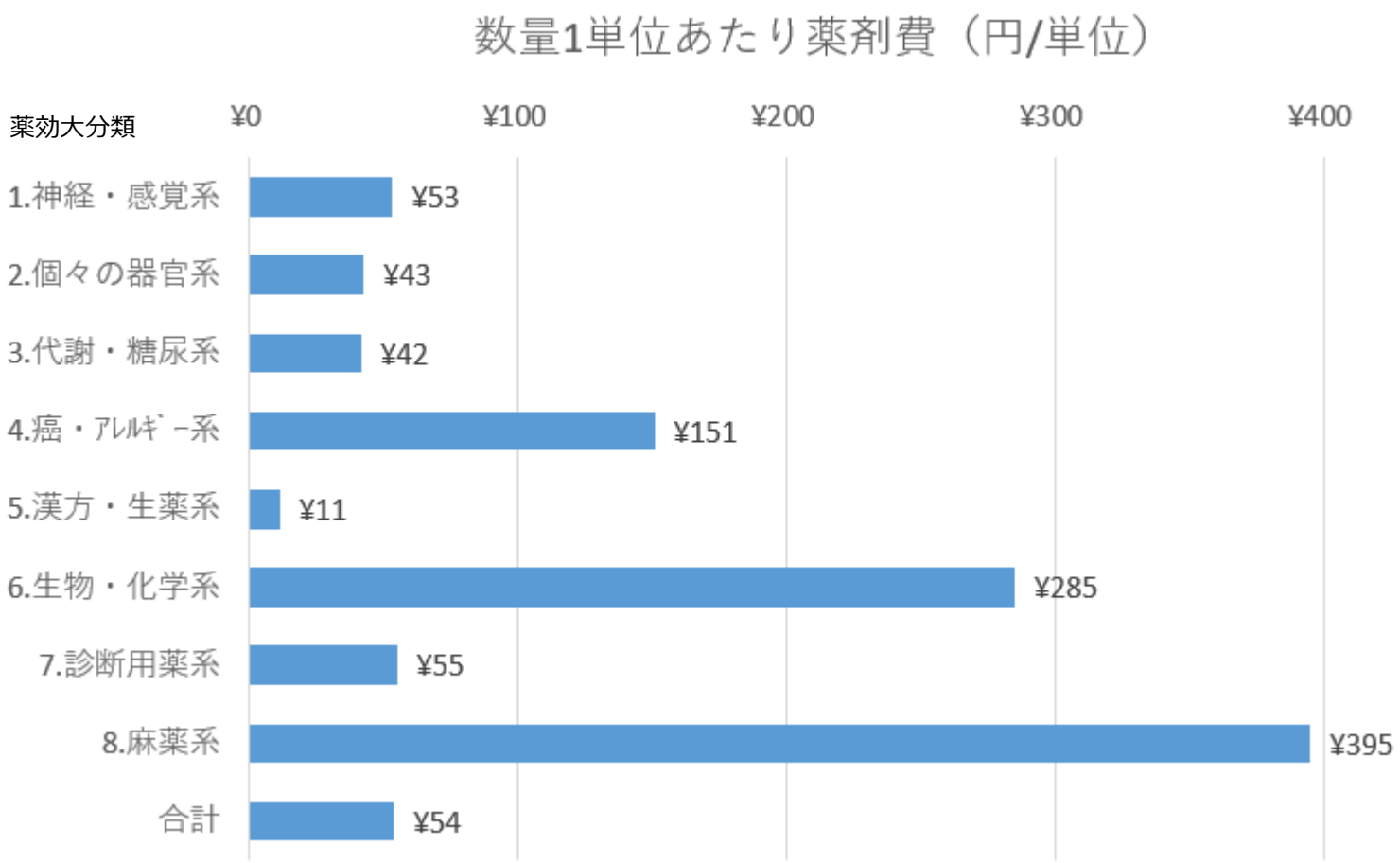
・ 今回の分析対象である2017年4月～2019年3月の2年間の合計では、以下の通り。

薬効大分類（正式名称）	品目数※1（構成比）	数量※2（構成比）	薬剤費※2（構成比）	具体例（薬剤費ベースで多い順）
1.神経・感覚系（神経系・感覚器官用医薬品）	3,651 (17.7%)	8,473,633,668 (14.4%)	¥450,737,769,629 (14.3%)	①アイリーア硝子体内注射液40mg/ml（約139億円） ②サインバルタカプセル20mg（約130億円） ③イーケプラ錠500mg（約121億円） ④レクサプロ錠10mg（約120億円） ⑤セレコックス錠100mg（約119億円）
2.個々の器官系（個々の器官系用医薬品）	7,450 (36.2%)	23,310,876,672 (39.7%)	¥993,962,523,045 (31.4%)	①レミケード点滴静注用100mg（約467億円） ②ネキシウムカプセル20mg（約215億円） ③ゼチーア錠10mg（約214億円） ④シムビコートタービュヘイラー60吸入（約186億円） ⑤ノルディトロピン フレックスプロ注10mg（約185億円）
3.代謝・糖尿系（代謝性医薬品）	3,330 (16.2%)	15,890,514,965 (27.1%)	¥660,073,457,927 (20.9%)	①ヒュミラ皮下注40mgシリンジ（約228億円） ②ジャヌビア錠50mg（約168億円） ③プログラフカプセル1mg（約145億円） ④ヒルドイドソフト軟膏0.3%（約145億円） ⑤シンポニー皮下注50mgシリンジ（約132億円）
4.癌・アレルギー系（組織細胞機能用医薬品）	1,566 (7.6%)	3,598,647,934 (6.1%)	¥542,362,962,100 (17.2%)	①アバスチン点滴静注用400mg（約268億円） ②オプジーボ点滴静注100mg（約207億円） ③キイトルーダ点滴静注100mg（約171億円） ④スプリセル錠50mg（約154億円） ⑤ザイザル錠5mg（約152億円）
5.漢方・生薬系（生薬・漢方処方に基づく医薬品）	1,950 (9.5%)	5,368,711,411 (9.1%)	¥60,089,645,841 (1.9%)	①ツムラ加味逍遙散エキス顆粒（約30億円） ②ツムラ補中益気湯エキス顆粒（約24億円） ③ツムラ大建中湯エキス顆粒（約21億円） ④ツムラ六君子湯エキス顆粒（約21億円） ⑤ツムラ麦門冬湯エキス顆粒（約20億円）
6.生物・化学系（病原生物に対する医薬品）	1,712 (8.3%)	1,432,003,217 (2.4%)	¥408,170,889,634 (12.9%)	①マヴィレット配合錠（約277億円） ②シナジス筋注液100mg（約221億円） ③照射濃厚血小板-LR「日赤」（約146億円） ④イナビル吸入粉末剤20mg（約136億円） ⑤ハーボニー配合錠（約129億円）
7.診断用薬系（治療を主目的としない医薬品）	719 (3.5%)	638,907,115 (1.1%)	¥35,127,773,543 (1.1%)	①イオパミロン注370シリンジ（約24億円） ②チャンピックス錠1mg（約22億円） ③ベリプラストＰコンビセット組織接着用（約20億円） ④オムニパーク300注シリンジ（約19億円） ⑤ユービット錠100mg（約19億円）
8.麻薬系（麻薬）	215 (1.0%)	27,386,607 (0.05%)	¥10,823,402,587 (0.3%)	①アルチバ静注用2mg（約13億円） ②フェントステープ2mg（約5億円） ③フェントステープ4mg（約4億円） ④フェンタニル注射液0.1mg（約4億円） ⑤レミフェンタニル静注用2mg（約4億円）
計	20,593 (100%)	58,740,681,587 (100%)	¥3,161,348,424,307 (100%)	

※1 実際に加入者のレセプトに記載された品目のみ。　※2「1」未満の端数あり（以降のスライドも同様）。

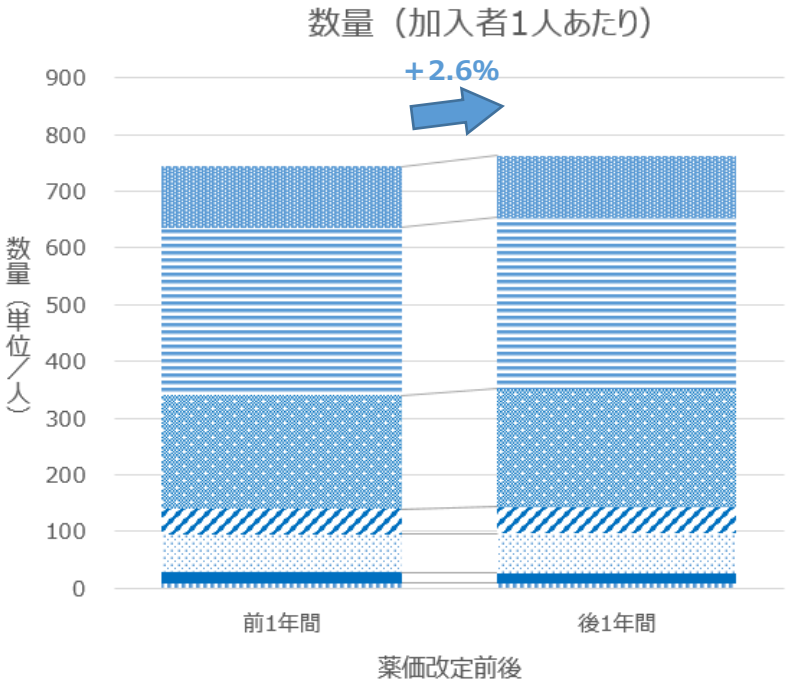
（6）薬効大分類別の数量１単位あたり薬剤費（2年間の合計）

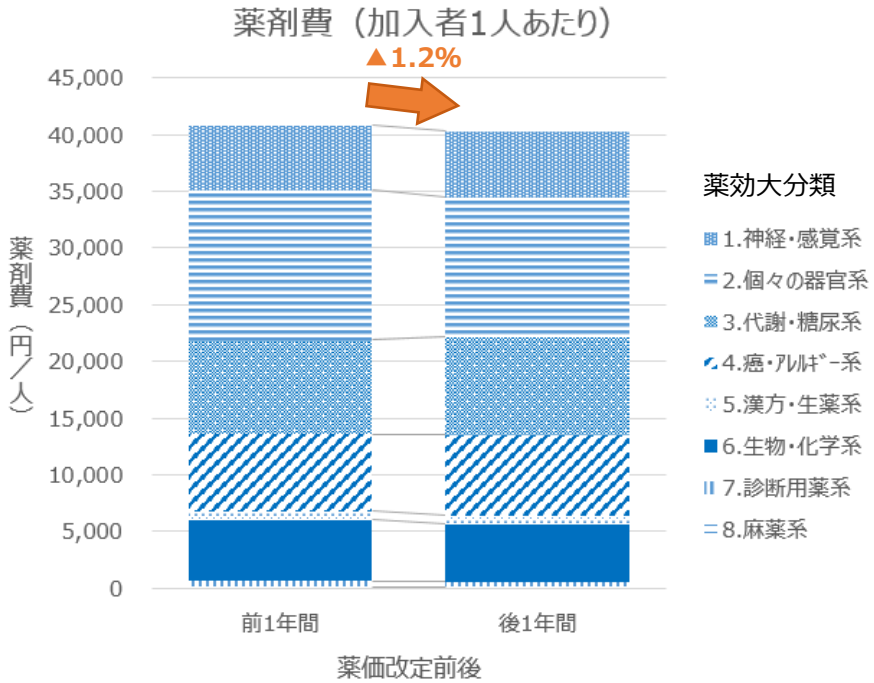
・数量１単位あたり薬剤費は、「麻薬系」、「生物・化学系」、「癌・アレルギー系」が高額であった。
・「麻薬系」は全薬効平均の約7倍、「生物・化学系」は約5倍、「癌・アレルギー系」は約3倍であった。



（7）薬効大分類別の薬価改定前後の数量・薬剤費（加入者1人あたり）

- 加入者1人あたり数量は、改定後は「生物・化学系」のみ減少し、それ以外は増加していた。
- 加入者1人あたり薬剤費は、改定後は「個々の器官系」と「生物・化学系」などで減少していた。



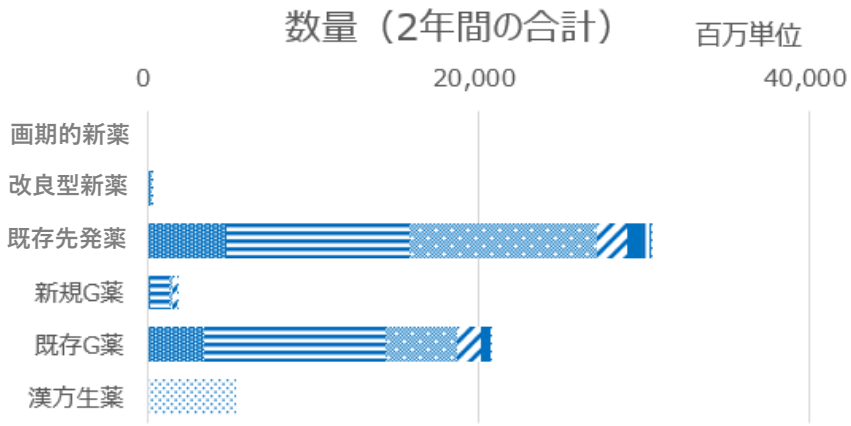


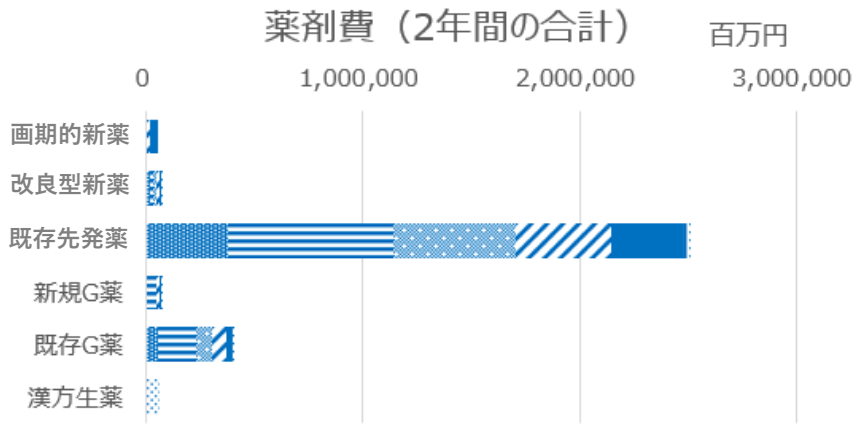
薬効大分類	前1年間	後1年間	差	伸び率
1.神経・感覚系	107.8	109.7	1.8	1.7%
2.個々の器官系	296.1	302.3	6.3	2.1%
3.代謝・糖尿系	200.5	207.4	6.9	3.4%
4.癌・ｱﾚﾙｷﾞｰ系	45.0	47.4	2.4	5.3%
5.漢方・生薬系	67.5	70.3	2.8	4.1%
6.生物・化学系	18.9	17.9	▲1.0	▲5.3%
7.診断用薬系	8.17	8.23	0.06	0.7%
8.麻薬系	0.34	0.36	0.02	5.4%
計	744.3	763.6	19.2	2.6%

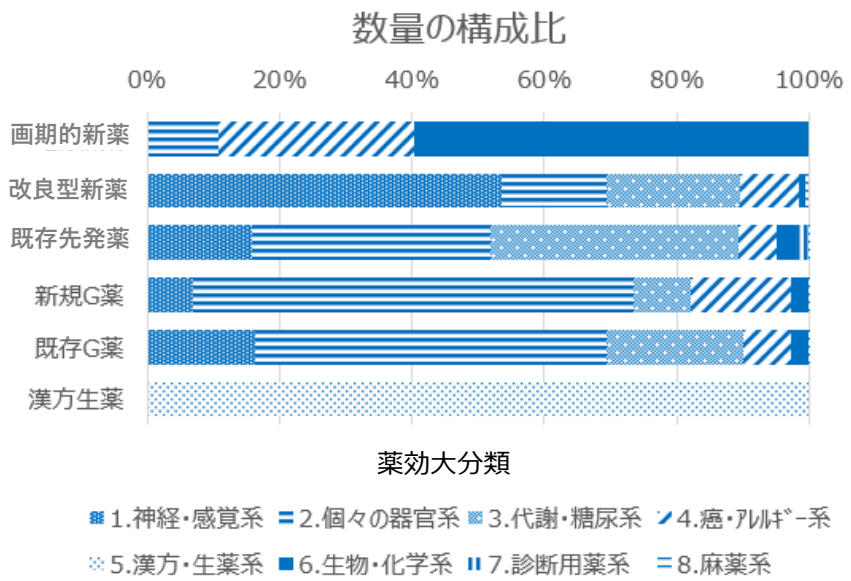
薬効大分類	前1年間	後1年間	差	伸び率
1.神経・感覚系	¥5,729	¥5,842	¥113	2.0%
2.個々の器官系	¥13,205	¥12,319	▲¥886	▲6.7%
3.代謝・糖尿系	¥8,292	¥8,651	¥360	4.3%
4.癌・ｱﾚﾙｷﾞｰ系	¥6,801	¥7,120	¥319	4.7%
5.漢方・生薬系	¥763	¥779	¥16	2.1%
6.生物・化学系	¥5,422	¥5,059	▲¥364	▲6.7%
7.診断用薬系	¥465	¥437	▲¥28	▲5.9%
8.麻薬系	¥143	¥134	▲¥9	▲6.2%
計	¥40,821	¥40,342	▲¥478	▲1.2%

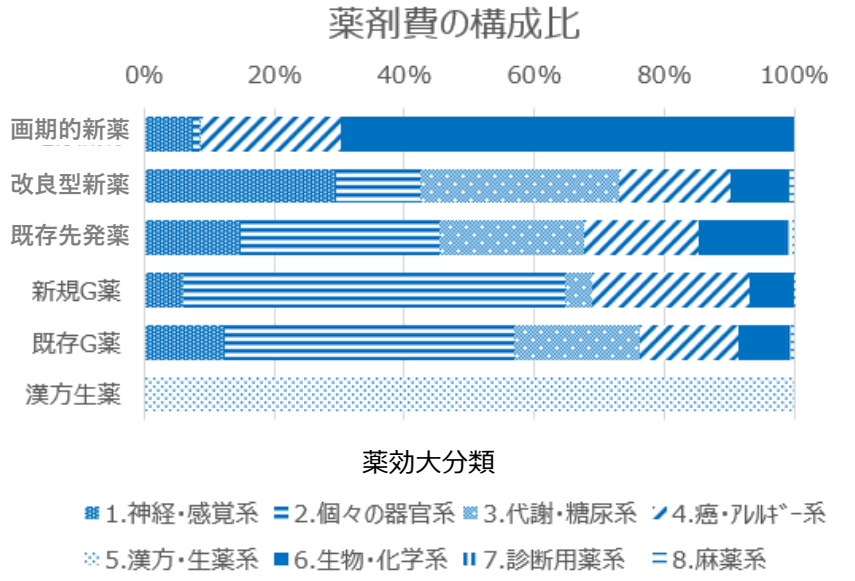
（8）各群の薬効大分類別の数量・薬剤費（2年間の合計）

・「画期的新薬」には、バイオ医薬品が含まれる「生物・化学系」、抗がん剤が含まれる「癌・アレルギー系」が多かった。









（9）薬価階級別の品目数・数量・薬剤費（2年間の合計）

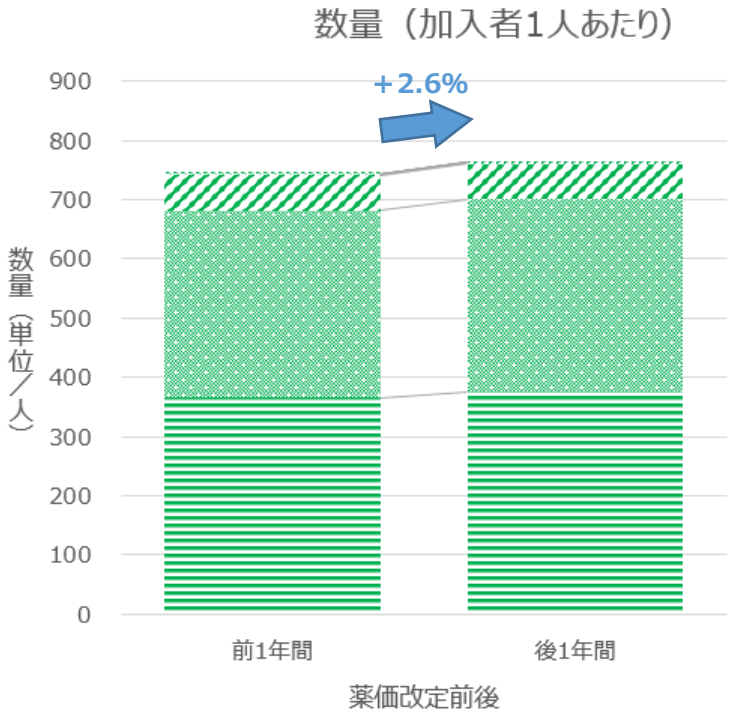
・今回の分析対象である2017年4月～2019年3月の2年間の合計では、以下の通り。

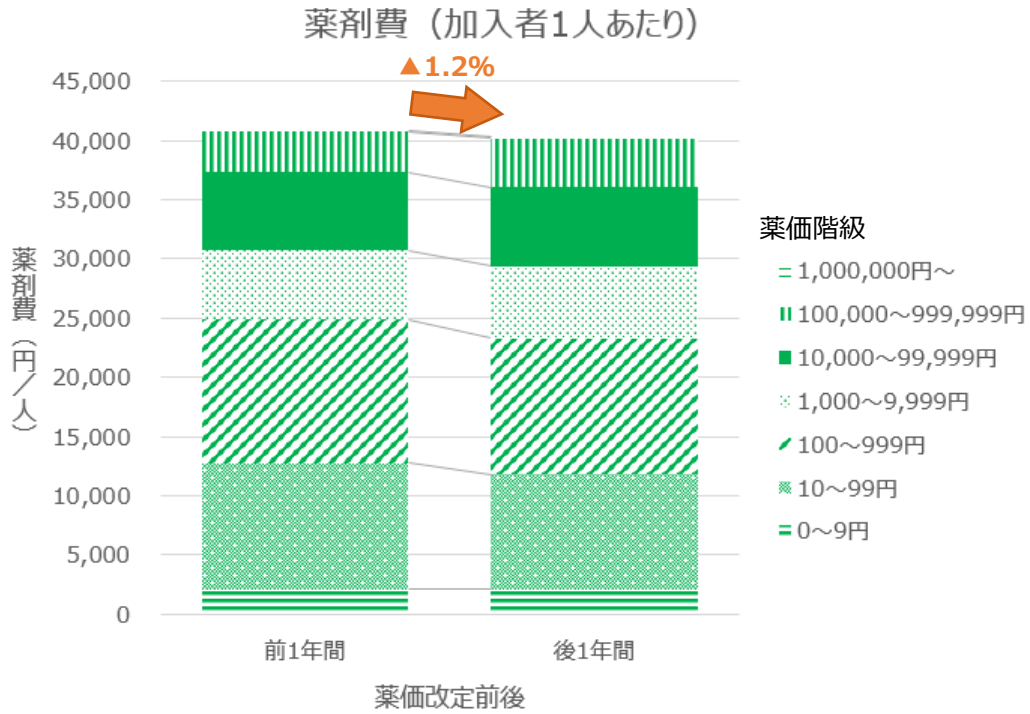
薬価階級※1	品目数※2（構成比）	数量※3（構成比）	薬剤費※3（構成比）	具体例（薬剤費ベースで多い順）
1,000,000円～	10 (0.05%)	2,706 (0.000005%)	7,360,680,484 (0.2%)	①スピンラザ髄注12mg (約40億円) ②イラリス皮下注用150mg (約14億円) ③イラリス皮下注射液150mg (約9億円) ④ヘムライブラ皮下注150mg (約3億円) ⑤ノボサーティーン静注用2500 (約2億円)
100,000～999,999円	169 (0.8%)	1,461,500 (0.002%)	295,712,264,053 (9.4%)	①アバスチン点滴静注用400mg (約268億円) ②シナジス筋注液100mg (約221億円) ③オプジーボ点滴静注100mg (約207億円) ④キイトルーダ点滴静注100mg (約171億円) ⑤アイリーア硝子体内注射液40mg (約139億円)
10,000～99,999円	624 (3.0%)	15,707,821 (0.03%)	517,195,299,917 (16.4%)	①レミケード点滴静注用100mg (約467億円) ②マヴィレット配合錠 (約277億円) ③ヒュミラ皮下注40mgシリンジ0.4mL (約228億円) ④ノルディトロピン フレックスプロ注10mg(約185億円) ⑤ハーボニー配合錠 (約129億円)
1,000～9,999円	1,957 (9.5%)	174,095,144 (0.3%)	462,841,190,117 (14.6%)	①シムビコートタービュヘイラー60吸入 (約186億円) ②スプリセル錠50mg (約154億円) ③イナビル吸入粉末剤20mg (約136億円) ④アラミスト点鼻液27.5μg噴霧用 (約108億円) ⑤レブラミドカプセル5mg (約107億円)
100～999円	3,610 (17.5%)	4,687,228,217 (8.0%)	922,035,961,046 (29.2%)	①ネキシウムカプセル20mg (約215億円) ②ゼチーア錠10mg (約214億円) ③ジャヌビア錠50mg (約168億円) ④プログラフカプセル1mg (約145億円) ⑤ロトリガ粒状カプセル2g (約137億円)
10～99円	8,427 (40.9%)	24,995,523,308 (42.6%)	792,795,372,913 (25.1%)	①ザイザル錠5mg (約152億円) ②ヒルドイドソフト軟膏0.3% (約145億円) ③ヒルドイドローション0.3% (約128億円) ④セレコックス錠100mg (約119億円) ⑤フェブリク錠20mg (約92億円)
0～9円	5,796 (28.1%)	28,866,662,890 (49.1%)	163,407,655,777 (5.2%)	①メトグルコ錠250mg (約43億円) ②エレンタール配合内用剤 (約37億円) ③ヘパリン類似物質油性クリーム0.3% (約27億円) ④レボチロキシンナトリウム錠 (約24億円) ⑤プレドニゾロン錠 (約23億円)
計	20,593 (100%)	58,740,681,587 (100%)	¥3,161,348,424,307 (100%)	

※1 分析対象期間の途中で階級が変わった医薬品は、期間中の最初の階級で集計した。
※2 実際に加入者のレセプトに記載された品目のみ。　※3「1」未満の端数あり（以降のスライドも同様）。

（10）薬価階級別の薬価改定前後の数量・薬剤費（加入者1人あたり）

・ 加入者1人あたり数量は、改定後は「百円台」の価格帯で減少し、それ以外は増加していた。
・ 加入者1人あたり薬剤費は、改定後は「十円台」・「百円台」の価格帯では減少していた。





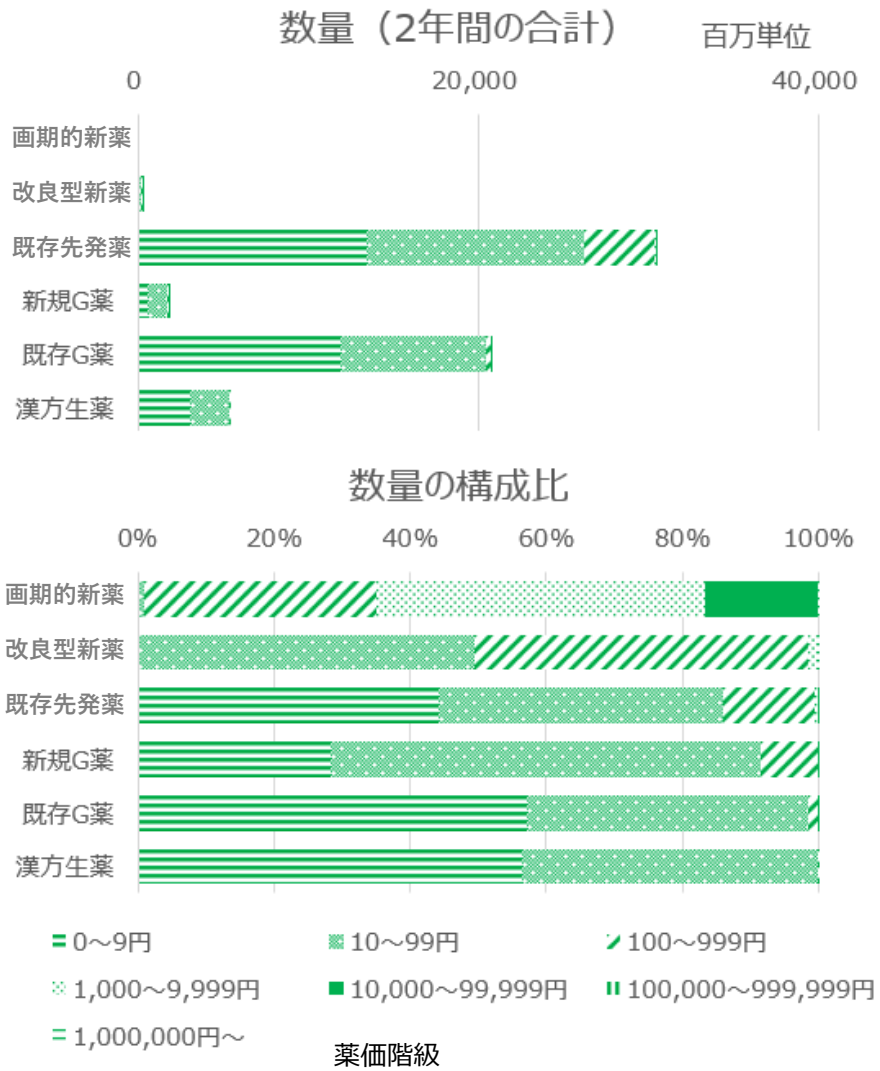
薬価階級	前1年間	後1年間	差	伸び率
1,000,000円～	0.00002	0.00005	0.00003	154.5%
100,000円～	0.017	0.021	0.004	22.6%
10,000円～	0.19	0.21	0.02	9.7%
1,000円～	2.2	2.3	0.1	6.1%
100円～	60.4	59.9	▲0.5	▲0.8%
10円～	316.1	325.5	9.4	3.0%
0円～	365.4	375.6	10.2	2.8%
計	744.3	763.6	19.2	2.6%

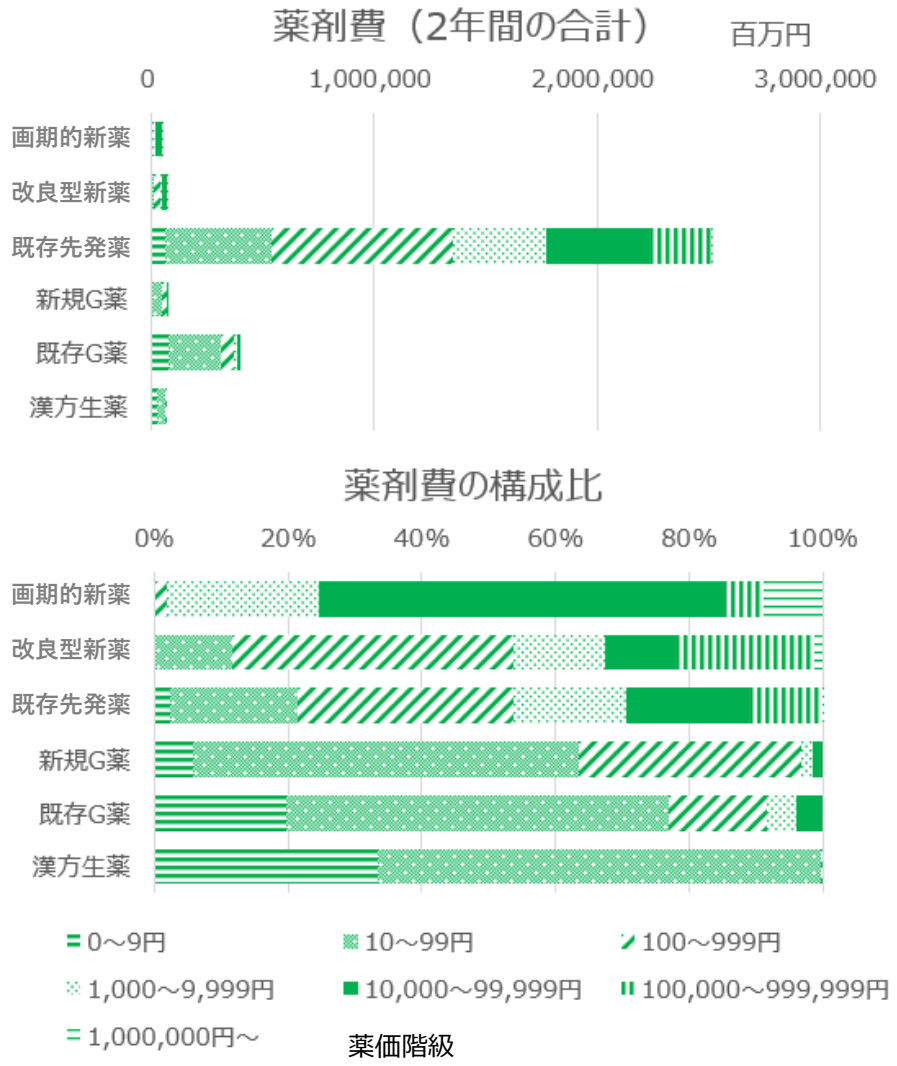
薬価階級	前1年間	後1年間	差	伸び率
1,000,000円～	¥51	¥137	¥86	167.5%
100,000円～	¥3,443	¥4,143	¥700	20.3%
10,000円～	¥6,609	¥6,668	¥59	0.9%
1,000円～	¥5,797	¥6,084	¥287	5.0%
100円～	¥12,162	¥11,514	▲¥648	▲5.3%
10円～	¥10,679	¥9,681	▲¥998	▲9.3%
0円～	¥2,080	¥2,115	¥35	1.7%
計	¥40,821	¥40,342	▲¥478	▲1.2%

※ 分析対象期間の途中で階級が変わった医薬品は、期間中の最初の階級で集計した。

（11）各群の薬価階級別の数量・薬剤費（2年間の合計）

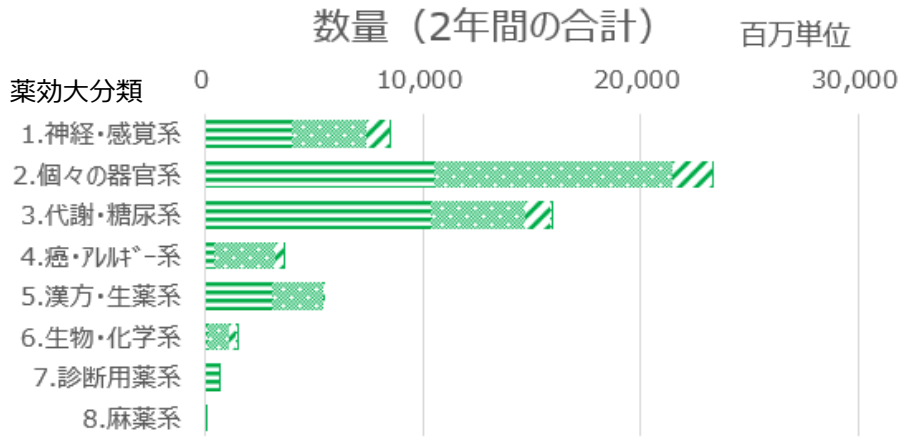
・「画期的新薬」の薬剤費は、薬価1万円以上の高額な医薬品が占める割合が大きかった。

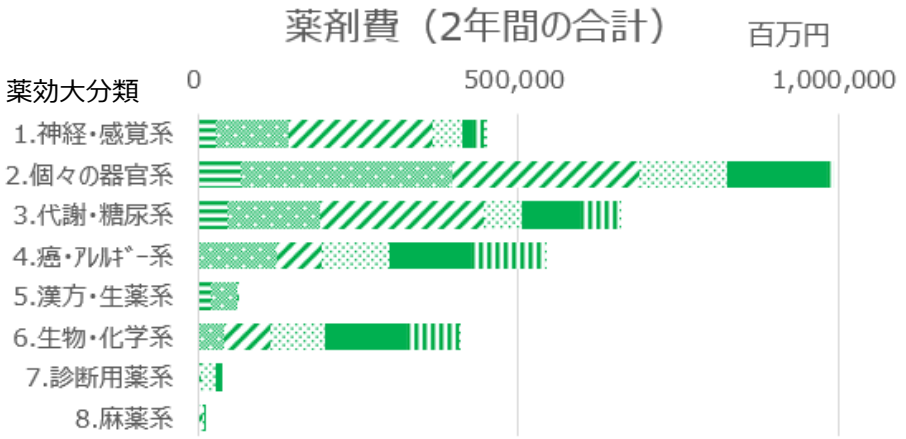


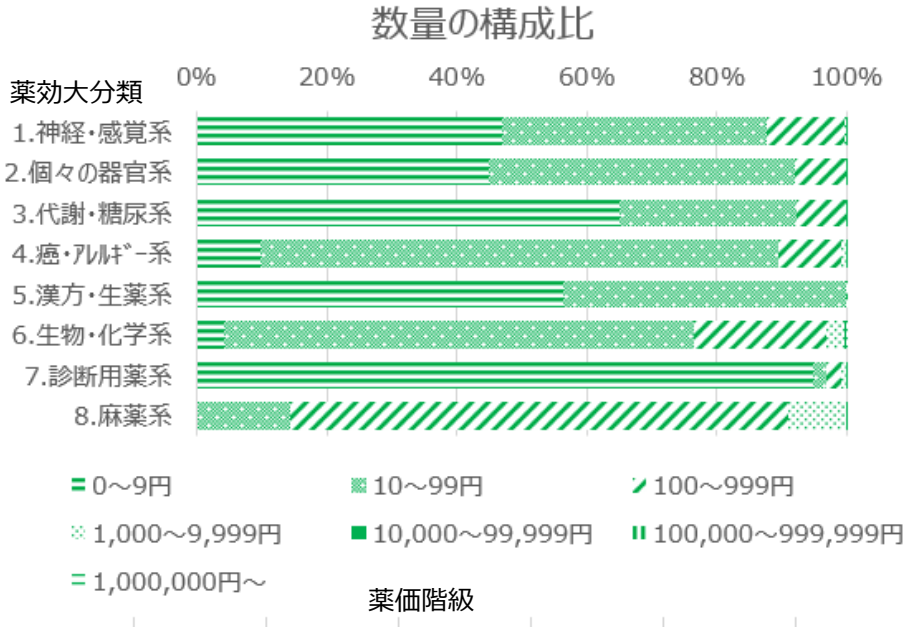


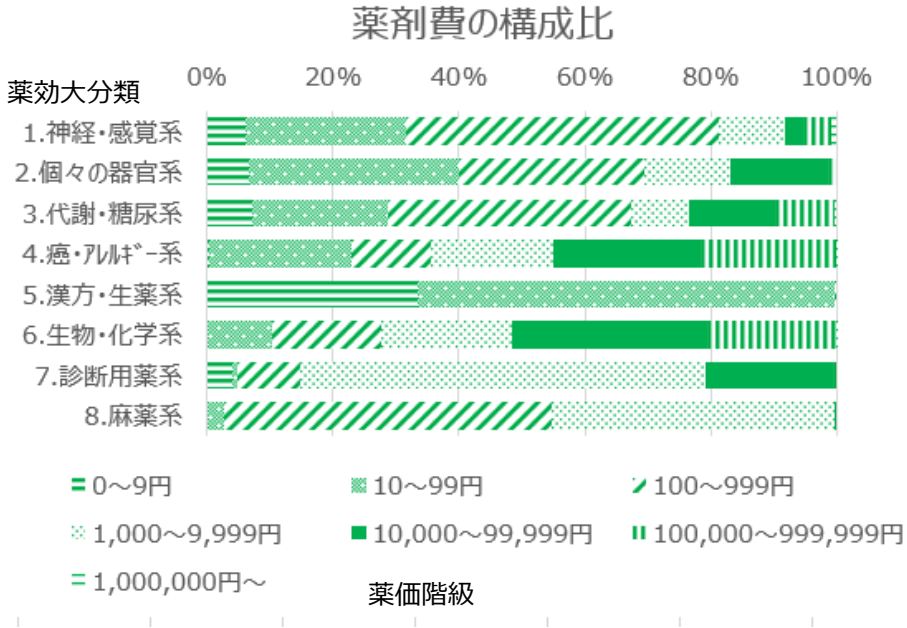
（12）薬効大分類別の薬価階級別の数量・薬剤費（2年間の合計）

・「生物・化学系」や「癌・アレルギー系」の薬剤費は、薬価1万円以上の高額な医薬品が占める割合が大きかった。









【 まとめ 】

・2018年4月の薬価改定率は薬剤費ベースで▲7.48%であったが、調剤・医科・DPC・歯科レセプトを合計した加入者1人あたり薬剤費は▲1.2%であったことから、今回は薬価改定率の1/6程度しか薬剤費は抑制されず、数量ベースでは1%未満の**「画期的新薬」・「改良型新薬」によって、薬価の減額改定の効果は主に相殺**されていた。

・2018年4月の薬価改定後、加入者1人あたり数量は「既存先発薬」が減少したのに対し、それ以外は増加していた。これは**「既存先発薬」から他の医薬品（主に「新規G薬」・「既存G薬」）への置き換わりが進んだ**結果と考えられる。

・数量1単位あたり平均薬剤費は、「画期的新薬」が「既存先発薬」の約80倍と突出して高かった。もともと薬価の高いバイオ医薬品や抗がん剤が多い上に、有用性加算などが付いた為と考えられる。一方で、有用性加算などが付かない「改良型新薬」も「既存先発薬」の約3倍であり、「新規G薬」も「既存G薬」の約2倍であったことから、**新規開発は薬価の高い分野で行われる傾向にある**と考えられる。

・薬価改定の主な目的は、薬剤費の伸びを抑制しつつ新薬の開発を促すことにあると考えられる。言い換えると、**薬価改定が見送られれば、有用な新薬を保険適用する為の財源捻出への影響は大きい**。有用性加算などが付く「画期的新薬」が適切な薬価で提供されることを期待しつつ、今後も動向を注視していきたい。

・薬価100円未満の医薬品は、品目数の7割、数量の9割、薬剤費の3割（年間4,800億円）を占める。患者個人の負担は服用期間や量によっても変わるので、薬価の低さのみを以て単純に論じることは出来ないが、保険は本来、「個人で負担し切れないリスクを確実にカバーする為の共助の仕組み」であることを鑑みれば、まずは**市販品類似薬の保険適用の除外や保険償還率の変更へ向けた検討に着手すべき**である。